
シンデレラの姉の計画

ゴン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シンデレラの姉の計画

【Nコード】

N7638I

【作者名】

ゴン

【あらすじ】

可哀そうなシンデレラ…毎日、毎日継母たちにいじめられて。でもいつかは王子様と結ばれて幸せに……ではなくシンデレラの姉がシンデレラを家から追い出すためあの手・この手で王子とくっつけようと奮闘するもの物語。あの悪魔を追い出すため今日も頑張ります！！ シンデレラの姉を主人公にしたファンタジー？です。

わ。そんなことよりもうすぐお義母さまとお姉さまが帰ってきます。早く夕食の用意してくださいませ」

「なんで私がこんなめに……………」

「私がしてもよろしいんですのよ?」

「私を本気で殺す気!? あなたの家事能力はもはや0ではなくマイナスです。家事をなめるな! そんな人の料理は食べたくない。とりあえず食事を作るからあなたはお母さまたちが帰ってこないか見張つてて!」

「わかりましたわ、ああ、今日はわたくしナポリタンな気分ですわ」

「今日はポトフとピーマンのひき肉づめです」

(くっ! 我慢、我慢よりリア。今は時間がない。とりあえお母さまたちが帰ってくるまでに家事を終わらせてシンデレラがしたことにならないと…………ああでもあの本どうしよう、やっぱり弁償かしら…………まだ読んでもないのに…………ああ、せめて読んでおくんだったタイムセールに行かず読めばよかった。でもピーマン安く手に入ったし…………カブもニンジンも安かった) とリリアが思っている

「ピーマンは嫌いですわ……………」

「今日はピーマンが安あったの! わがままいわない」

「どけち…………ですわ」シンデレラは小声でいい放つ。

(このアマアーだれのために毎日毎日やってると思ってる！お前のせいで『目指せエクソシスト！今日からあなたも悪魔払いができる！！』(本の題名)が読めなかったのにー！！いつか必ず復讐してやる！！家から追い出してやる！)

第2話 すべてのはじまり

今思えばあの日から私の人生は狂い続けている。

10年ほど前お母さまは再婚をした。しかも伯爵家と。元々成り上がり成金に嫁いでいたお母さまは上機嫌。私も妹という存在に胸をワクワクさせながら新しい家族と会う日を待ち望んでいた。そして待ちに待ったあの日、私はその日まで妹というものを望んでいた自分を呪った。

「はじめまして、お姉さまたち。わたしの名前はシルヴィアです。どうぞよろしくお願いします」

と、だれからも愛されるようなかわいい女の子が私に話しかけてきた。

お姉さまは話しかけられたのを分かっているはずなのに無視してお母様のところに行き、シルヴィアは顔をシユンとさせたけど長年妹という存在を欲しがっていた私はうれしくなった。こんなかわいい妹ができるなんて。私がこの子を守ってあげなくては！！そう思い、「はじめましてシルヴィア。私の名前はリリアよ。仲良くしましよ。うね。あっちに行っただのがマリーお姉さまよ。ちょっと意地悪なのだけど私が守ってあげるわ。」そう言うとシルヴィアは笑顔になり「ほんと？リリア姉さまはわたしを守ってくれるの？」大きな目をキラキラさせてシルヴィアが言いました。

「ええ、ほんとうよ。シルヴィアを苛める子がいたら守ってあげるわ」

「じゃあ、約束の証にシルヴィアを守るってサインして！！」

シルヴィアが紙とペンを差し出しました。紙にはなにかわからない文字が並んでいた。

「ここよ。ここにリリア姉さまの名前をかいて」

私は不思議に思いながらも言われるままペンをとり、

“リリア＝フォンス”

と名前を書き終えた直後

ビリッ 感電したように体中の体が一瞬縛られる感じに陥った。すぐそんな感覚はなくなり不思議に思っている

「ふふふ、ありがとう、お姉さま。うれしい。これでお姉さまはもうわたしの下僕ね！」

「へっ」

「うふふ、あのねお姉さま。わたし最近黒魔術にはまってるの！おもしろいのよ。今の紙は名前を書いたらその紙を作った人の下僕になる魔法なの！すごいでしょ？さっきしびれる感じが走ったの。術は成功したのね。うれしいわ！」

満点の笑みでシルヴィアは言われたその言葉……

この時リリア7歳、シルヴィアわずか5歳のことです。

お義父様が亡くなりお母様とマリーお姉さまがシルヴィアを苛めだしてから今日に至るまで私は影ながらシルヴィアを助けてきたのです。

強制的に……

私はあの日天使の皮をかぶった悪魔に出会いました。

幼く、純粋な私は簡単に罠に引っ掛かりました。

あの日以来私は悪魔の下僕・・・妹思いのやさしく献身的な姉と
なったのです。

第3話 夢（野望）と現実

あの悪魔と出会ってから10年。長い・・・長い地獄を味わったわ。

しかし、いつか必ず私は下剋上？ 奴隷解放？ 自由を手に入れることをここに宣言する！！

あの娘も年頃の娘、しかも容姿端麗・スタイル抜群となんとお腹が立つが外面はいい。求婚相手も後を絶たないだろう。結婚させ嫁がせてしまえばいい。お母様のことだ。いくらシンデレラがこの家の第一後継者であったとしてもそれを認めはしないはずだ。

だが求婚相手から金でも渡されればすぐに承諾するはず。なんせ家は母と姉の贅沢三昧＋シンデレラの怪しげな通販商品で火の車だ。あの浪費家どもめ、お義父様の家をつぶす気か！！おかげで家は家政婦さん一人雇えないではないか！ 食費を削るにも限界があるんだぞ。私だっただまには他の人が作った温かくて豪華な食事を取りたいんだ。そのためにはまずシンデレラを家から追放し（結婚）、自由を手に入れる。母たちも厄介だが先にあの2人を相手にした後、シンデレラと戦う勇氣はない！

おお、神よ。どうか私を見守っていてください。

「お姉さま、さつきから一人でなにをしますの？ きもいですがよっ。」

「きもつつ！？ くつつ・・・（人が新たな決意を胸に神に祈っているのに！）。まあ、いいわ。シンデレラ、私今から買い物に行ってくるわ。少し遅くなるかもしれないの。私が帰る前にお母様たちが帰ってきたら図書館に行っているって伝えてちょうだい」

「わかりましたわ。お土産は『エマ』（洋菓子店）のチーズケーキが・・・」

「ありません！！だいたい『エマ』のお菓子は高いし（ここ重要）人気のよ。無理言わないで。といあえず行ってきます」

「・・・どけち・・・」

「...行ってきます」

まったくもう、毎度毎度と・・・。とりあえず買い物と・・・。昨日のシンデレラのせいで危険物になった本買い換えておかないと。早いとこ謝って弁償しなきゃね・・・。

ああ、またいらん出費が・・・

第4話 本屋と乙女を捨ててる少女

「すいませ〜ん。ここに『目指せエクソシスト！今日からあなたも悪魔払いができる！』という本置いてませんか？」

「いや〜うちはノーマルな本やなもんで、そんなマニアックな本置いてないな〜」

「そうですかあ。」

この店ですでに5件目。あの本はなかなか普通の本屋には置いてないらしい。ますます惜しいことをした。シンデレラに危険物Xにされる前に読んでおけばよかった。

リアが絶望に打ち砕けていると目の前の本屋のおじさんが口を開いた。

「あつても、もしかしたら、裏通りになる『伝時屋』なら置いてあるかもしれんな〜」

「本当ですか！！場所教えて下さい。」

「ああ・・・でも裏通りはここらと違ってあんたみないなお嬢さんが入るとこじゃないんだが…」

「大丈夫です。私襲われるような外見でもないですし、危険察知能力と逃げ足には自信があります！！」

・・・花の乙女がこんなんでいいのだろうか。ってか危険察知能力って動物か？ほんとは野生の動物かなにかなのか。危険を察知す

ると髪の毛が逆立ちするの！？大丈夫なのか？

この時本屋のおじさん（ロナウド、通称ロドじい 57歳）は乙女を捨てている少女を見ながら心の中でつつこんでいた。あくまで心の中である。

そんな心のつつこみなどリリアは気付かない。気付くはずがない。たとえロドじいが憐れみと未確認生物でも見るような眼で見えていたとしても。

「とにかく場所教えて下さい！！！」

リリアの根気に負け、店の場所をロドじいが場所を吐いたのはわずか3分後のことでした。

第4話 本屋と乙女を捨ててる少女（後書き）

久しぶりの投稿です。そして話が進みません。誤字脱字など多いと思います。見つけたら教えて頂けると幸いです。

第5話 伝時屋と失礼男

ロドじいの忠告も無視し半ば強制的に入手した『伝時屋』の場所。それは裏通りの最奥にひっそりとあった。

つてか、『伝時屋』って変な名前ね。しかもこれ何屋さん？本屋って雰囲気じゃないしわね。あの娘が好きそうな雰囲気醸し出しているのは気のせいかしら。

そんなふう to 思いながらもリリアはドアをノックした。
コンコン

「すいませ〜ん。本を探しているんですが・・・」

リリアがノックして店に入るとフードで顔を隠した一人の人間がいた。リリアより頭一つ分以上背が高い。おそらく男性だろう。さすが裏通り、みるからに怪しそうな人がいる。部屋自体はさほど広くなく、周りの棚や机に本や骨董品、なぜか家庭用品まで兼ね備えていた。フードをかぶっている男は店員に見えないがとりあえず口を開けようとしたその時、

「めずらしいなあ〜こんな店に若い娘さんが来るなんてよう。店をお間違えでねえか？」

突如店の奥から人の声が聞こえた。慌ててその方向をみると30〜40代に見える無精ひげを生やした男がいた。

「いいえ。ここは『伝時屋』でしょ？私本を探しているの。表通

りの本屋で置いてなくて。ここなら置いてあるかもしれないと言われたからここに来たのよ」

「そりゃあ奇特なお嬢さんだ！あんたみないなお嬢さんがこんな場所まで一人で来るなんざ。ここに来る途中なにもなかったかい？」

「スリに2回ほどと恐喝に1回あいかけたけど、後は特に何も。だいたいもし仮に刃物とかで脅されても私はびた一文払うつもりはないわ。」

「……」

「……」

なぜか妙な顔をされた。しかもフードをかぶっている人も何気にこっちを見ている。

なにようつ顔も見せないくせに。

「んまあ、何も？なかつたんならいいけどよう。んで、ほしい本とやらは？」

「ああ、そんだったわ。『目指せエクソシスト！今日からあなたも悪魔払いができる！！』って本を探しているの。ここに置いてあるかしら？」

「……お嬢ちゃん（もはやお嬢さんではない）、変っているって言われない？」

「失礼ね。いたって普通で平凡で一般的で善良な女の子よ!!」

『普通』 『一般的』 『平凡』 ってお嬢ちゃん、なんか頑なに自分は普通の人です。みないたこといってもなんか違うと思うんだ、俺。

ぶっつっ

今だれか笑ったな。私でもないしこの失礼極まりないおじさんでもない。ってことは・・・リアはフードをかぶっている男に視線を移した。そして男は肩を震わし笑っていた。

失礼男2名に追加。

第6話 男の顔、それは女の敵

男は笑っていた。フードで顔が見えなくても丸わかりだ。しかし、男は私の視線に気づき笑うことをやめた。そして、

「失礼しました。つい、あなたの話がおもしろくて」

・・・リアの思考回路は停止した。男はフードを取り顔を現したのだ。顔が見れるのはいい。が、その顔に問題があった。男の髪は漆黒・眼は深く透き通った緑色の目、なかなかお目にかかれない美しい容姿をしていた。

きれいな眼・・・って、ビックリした！。久しぶりにシンデレラと肩を並べれる顔を見たわ。あれで男なの？そんなことあっていいの？厚かましい奴ね。女の敵よ。だいたいなんでこんなところにいるんな人がいるのよ？太陽の下でサンサンと輝いてなさいよ。はつまさか、整形！？どこを直したのかしら？鼻？顎？それと全身？？いくらかかったのかしら。

「・・・お嬢ちゃん、なにが言いたいか顔に出てるよ。」

「えっとうそ！？本当にしてるの！？」

「・・・してません。自前です。まさか、こんな風に思う人がいるとは思いませんでした。」

男はなにか面白い物でも見るかのように私を見た。

「失礼しました。不躰でしたわね。なかなかお会いできないような素敵な容姿の男性に正直驚いてしまつて。」
リリアは淑女らしく非礼を詫びた。

「なんだあゝお譲ちゃん。急にまるでレディのようなしゃべり方になつたな〜」

伝時屋が変な眼で見ってくる。

リリアは考えていた。最初はパニックしてしまったがあれほどの容姿と物言い、おそらく貴族であることは間違いない。下手に反感を買うわけにはいかない。しかもここは表の町ではない。貴族である人間が好き好んで裏に来るわけがない。相手も私が庶民ではないことに気づいている可能性もある。ここは穩便に済ませ今日は一度トングずらすしかない。兎に角とつと帰ろう。

「失礼ですね。ところで本はありますか？」

リリアは半ば強制的に話を変えた。

「いや〜ここにはない。取り寄せはできるけど1週間以上はかかると思うが。取り寄せで？」

よかった。日にちがかかるのは結構痛いがこの際仕方ない。手に入るだけでした。

「ええ、お願いします。では私はまた日を改め・・・」

「さっき言つてた本、わたし持ってますよ」

リリアがとつと話を終わらせ帰ろうとすると、男は言葉を発した。

第7話 誘惑と微笑

眼の前の男は何がしたいのだろう。私は怪訝な顔を男に向ける。
伝時屋も何もしゃべらない。

「あの本の著者、実は知り合いなんですよ。それで知り合いのよしみで頂きました。自分でも1冊購入しているから余るんです。笑ったお詫びも兼ねてよかったですよ。」

知り合い？おいおい、あんなマニアックな本書いてる人の知り合いなの？ていうか、この人何がしたいのよ。わざわざ自分から関わり持つてどうすんのよ。

この時リリアの危険察知能力アンテナが動いた。

「せっかくですが、あの本は自分で買いますわ。実は借り物で返さないといけないので、人から譲って頂いたものを返すのは失礼になってしまいますもの。御好意だけ頂きます。ありがとうございます」

「そうですね。あの本限定本でなかなか手に入らないものですよ、お値段も高額になると思ったんですがそれは仕方ないですね」

男は少し残念そうだ。

「……ちなみに御幾くらいですか？」

「そうですね、元の値段が2万ギルですが、今から手に入れるとなると倍以上に跳ね上がった金額になるかもしれませんね。」

「そうだなあ、ウチも商売だからかかった金額分と手数料はしっかりといただくぜえ。」

た、高い……

リリアは100のダメージを喰らった。瀕死状態である。

くっそんなに希少価値が高いものだったなんて!!」なんで図書館で借りれる本なのに……2万ギル×2＝4万ギルとして……やばい。私のお金じゃ足りない。食費削ってもぎりぎり赤字。

しかもあの浪費家どもがまたドレスの新調でもしたら完璧ノックアウト!!

普通の貴族ならこんな思いせず済んだのに……背に腹は代えられない!ここはせめて安く譲ってもらおうか……恥を捨てろ。リリア!今ならまだ間に合う。

「やっぱり譲って頂けますか……。」

男はリリアが瀕死の状態で青くなっているのを男は面白そうに見ていた。

「ええ、いいですよ。ただ1つ条件があります。」

男は微笑みながら言った。微笑みはとても美しく、普通なら人を魅了してしまうだろう。だけど私はその微笑みをみて早くも後悔の念にかられる。

ああ、やっぱり……

その微笑みはリアアがよく知っている微笑みに似ていた。

そう、シンデレラの微笑みに・・・

第8話 危険！？なバイト

怖い。この人が怖い。あの微笑みが怖い。リリアのは全身の毛がよだつのが感じた。逃げたい。逃げたい。おそろく顔にも出ているだろう。

「そんな顔しないでください。ただ1日バイトをして頂きたいのです」

男は困ったような顔に戻る。

「・・・バイト？」

リリアはその一言を言うので精一杯だ。

「ええ、決して怪しいバイトではありません。ああ、すみません。名前を先に言うべきでしたね。私はカイン＝フォートと言います。しがなにお城勤めの文官です。上司の命令でお守をできる人を探してまして。あなたに1日子供の子守をして頂きたいのです。」

「・・・お守？」

「ええ、今年6歳になられます、第一王女マリア様の子守を」

「・・・はっ？」

文官？子守？王女？情報が整理できない。この人の言ってることは

何語？私はだれ？何人？私は今どこにいるの？

「実はマリア様が城下町を見たいとおっしゃりまして。城にいる侍女では町を案内するのが難しいのであなたに案内して頂きたいのです」

確かに王族に直接仕える侍女は貴族がほとんどだ。侍女といっても行儀見習いのためだったり、玉の輿目的だったりする。庶民出の侍女もいるだろうが町にも詳しいだろうが身分の違いのため許されないのだろうか。しかし、今日あつたばかりの得体のしれない女にこんな話をしていいものか？というか、この男が本当のこと言っているかも怪しい。

「あゝお譲ちゃん、この男が言ってることは本当だぜえ。この男そのためにウチに来たんだからな」

伝時屋が私の疑問に答える。

「正直さつきこの男から依頼された時は困ってたんだ。町に詳しく安全そうな女を探すの面倒でな。」

「・・・安全？」

「そうです。王女を害する可能性もなく、王女を使って王族に媚を売るような人間を王女の傍に置くことはできません。それに王女と城下町を歩くことは危険も伴います。あなたはどちらもしそうに見えませんか、本ほしいでしょ？」

「ぶつつ。確かにこんな裏通りに一人で来るし、お譲ちゃん媚売るのできなそう」

伝時屋は笑いながら言う。

つくづく腹立つ男ね、伝時屋。確かに媚を売ってどうこうなる容

姿でもプロポーションでもないけどもね！！ゴマすりぐらいできる
かもしれないじゃない！怒りである意味冷静さを取り戻してきた。
男はそれに気づいたのか決断を迫る。

「引き受けて頂けますか？」

男、カインフットは私の顔をまっすぐに見つめ言う。
はっきり言って卑怯だと思う。正直信用できないし、この男はやっ
ぱり怖い。けど、あんな綺麗な眼で見られたら頷いてしまおう。

「わかりました。謹んでお引き受けします」

第9話 帰宅

・・・よかった。では、また詳しく打ち合わせをさせて頂きたいので明日にでもお会いできるでしょうか？

男と明日会う約束をし、リリアは早々に店を出た。

予定外に時間は過ぎていたようだ。気づけば家に帰る予定時間の1時間以上オーバーしてしまっていた。リリアはその事実気づき焦った。ヤバイ！タイムサービスが！！急いで馴染みのスーパー『トレビアン』に走った。ついたと同時に店内放送が響く。

「あゝあゝ。本日のタイムサービスは終了です。みなさん、うちの子たちをしつかり愛して食して下さい。そして明日も戦え。手に入れる！！明日のメインはボンド夫妻の天然無農薬野菜のホウレン草ちゃんとキュウリちゃんの詰め放題200セル！、そしてとっておきは5名さま限り国産ステーキ牛500gがたった500セルだ！
！お得、お得だよ〜」

おおー！！！！

店全体に歓喜の声が広がる。

さようなら白菜ちゃんと豚肉ちゃん。（今日の特売品）まてつてね、ホウレン草くん、キュウリちゃん、そして牛くん！明日必ず君たちを奪ってみせるわ！

リリアは心で涙を流しながら新たな決意をし帰路についた。

「ただいま帰りました。」

「お帰りなさい、お姉さま。随分遅かったですわね。なにかありましたの？」

帰るなりシンデレラが迎えて言う。

「ちょっと面白い本があつて時間がたつのを忘れてたのよ。それよりお母様たちは？」

「まだ帰られてませんわ」

「そう。よかった。じゃあご飯作るから洗濯物入れて畳んでちょうだい」

本当によかった。帰ってきてたら面倒なものね。リリアはエプロンをしながらシンデレラに仕事を言いつける。洗濯物を依頼したのはもし母親たちが帰った際にシンデレラがちゃんと仕事をしていると思わせるためだ。

「・・・わかりましたわ。あ、お姉さま、背中に蝶々が。」

シンデレラはそう言い、私の背中を触り蝶々を指の上に乗せた。

その蝶々はあまりにもあの眼に似ていて美しく吸い込まれそうな綺麗な緑色をしていた。

「あら、本当。こんな蝶々いるのね。初めて見たわ。悪いけどついでに外に逃がしてあげて」

リリアはそう言い、台所に向かう。

「ええ、お姉さま、そうしますわ」

シンデレラは微笑み姉の後ろ姿を見ながら言う。

そのまま洗濯物を入れ込むため外に出た。

今日は風が強い。

シンデレラは美しい金髪の長い髪が乱れるのも気にしなかった。そして、

“姿を現せ”

まるで呪文のように言葉を発した。

同時にシンデレラの手の中で蝶々が青く淡い炎に包まれ灰となる。

「・・・式神ね・・・お姉さま本当にどこでなにをしてらしたの・・・」

シンデレラの小さな囁きは風とともに掻き消えた。

第9話 帰宅（後書き）

どうでもいいとは思いますが

1セル＝1円

1ギル＝1万ってな感じです。

第10話 男の正体

「つつつ・・・」

男は痛みのため左目を手で覆う。まさか式神を見破られ、消されるなど思いもなかった。

部屋の中には2人の男がいた。

「おい、大丈夫か！？何があった？」
もう一人の男が焦った様に言う。

「式神が消された」

「はっ！？おい、あのお譲ちゃんやっぱり危険じゃねえか？」

「いえ、式神を消したのは別の人物です。彼女はまったく気づいていない。まあ、住んでいる場所が分かったので、後は普通に調べれば素性が分かります」

問題は式神を消した女・・・あの顔なら社交界でも一番華になりそうな顔だが一度も見たことがない。彼女を姉と言っていたが・・・
ククク

今日一日彼女を見ただけでいろんな物が見えた。・・・おもしろ

い。

男はこれからの事を思うと笑ってしまふ。

「……」

一人で笑っている男を見てもう一人の男は思った。

こつ怖い！気持ち悪つりいゝもうやだ。こいつヤダ！お嬢ちゃん逃げる！なんか狙われてるぞう！！

「今日は帰りますよ。もう一つの仕事頼みましたよ」

男は用は済んだとばかりに帰ろうとする。式神を通して彼女を観察していたため動けなかったのである。

一歩間違えればストーカーだ。

「ああ〜王女さまあを害そうとする奴らの情報だろう。俺じゃなくても城でなんとかしろよう」

「何かあるとすれば城下町に出た時が一番怪しい。それならこの『裏』の人間を使う可能性が高い。そのために貴方に依頼にしたいんですよ。『伝時屋』いや、情報屋の『伝耳屋』が正しいですかね・

「

『耳』それは情報を表す。『伝耳屋』は本来情報を買って買いとこるである。ただ一つ他の情報屋違うことは王家に害となる情報を売らない忠誠心があるということ。

……まあ、ぶつちやけ王家もこの男も敵に回すと怖いからな〜
伝耳屋は心の中でそつと吐いた。

「お嬢ちゃんの情報はいらねえの？多分すぐ分かるぜえ？」

「いえ、結構。彼女のことは自分でします」

男は即答した。まるでそれではつまらない……と言うように。

「了解。でわ、またのご来店をお待ちしております。カイン＝フォート＝アルマンディ公爵。いや、若き宰相閣下どの」

男は微笑み店を後にした。

第10話 男の正体（後書き）

若くて宰相とか大丈夫かな？と、自分が一番思っ
てしまいました。ついでに彼らはまだリアの名前を
聞いてません。言わずに帰ったから・・・

第11話 変りない非平凡な朝

チュウチュウ

朝か、リリアはそう思ったが昨日のことで疲れていたのかなかなか目を開けない。小鳥かしら。非常食になるかしら。でもスズメはあまり食べるとこなさそうなのよね。やっぱスープの出汁かな、でも、スズメを餌にもう少し大物を狙うって手もあるわね。

……ん！？チュウチュウ？チュンチュンではなく？？不思議に思い瞼を開けたその先には

「ぎゃあああああー！ー！ー！ー！ー！ー！」

ね、ネズミ！！ネズミがいる。私のベッドの上に！もう半分意識は飛んでしまっている。

「まあ、お姉さま。今日は何ですか？」

シンデレラがまたか、とでも言いたげに部屋に入ってきた。

「チュツチヨウってベツベツベツト・・・ね、ネズミが・・・」
もうなにが言いたいか分からない。

「チューベッド？ネズミ・・・ああ、こんなところにいたのね。モルモットちゃん！」

シンデレラはネズミに向かって言った。確かにネズミに向かってだ。

「モルモットちゃん！？あんたのペットなの!？」

ネズミがペットなの？

「いいえ。モルモットですわ。ちなみにこの子は2号。1号はおとなしくかごに入ってくれてますのに、昨日実験しようとしたら急に逃げてしまつて・・・でも見つかつてよかつたですわ」

・モルモット・実験・・・聞きたくもないいやな言葉だ。なんだかネズミが少し可哀そうになつてきた。そう思いネズミに視線を下げると

ネズミは部屋の隅に逃げていた。心なしか目が潤んでいる気がする。『助けえて！たつゆけて！きよわいでちゅよう！！』

・・・ネズミの声が聞こえた気がした。んん、幻聴か？最近内職で夜更かししてたからかな。

「あら、実験は成功したようですわね！」

「実験？」

「ええ、今お姉さまにも声が聞こえたでしょう？ネズミちゃんの。」

『声が聞こえゆの？だったら、あのにんげんからたしゆけてくださいでチュウ！』

また、声が聞こえた。ネズミは必至に訴えてくる。できれば受け入れたくない。現実を受け入れるしかないのか・・・せめて小鳥とリスとか万人受けできそうな生き物であればよかつたのに。

「まあ、かわいがつてあげたのに可愛くない子ですわね！」

ああ、たまには平凡に生きたい。普通に起きたいし、普通の会話がしたい。

リリアは思う。しかし思ったところで現実是非平凡。

リリアのいつもの一日が始まる。

第12話 ある意味密会

結局あのネズミはチュウ吉と名付けて飼うことにした。知能が発達した影響か指示に従って細かいところの掃除をしてくれる。

『たちゆけてくれたおれえにおてちゅだいしゆるでチュウ（助けてくれたお礼にお手伝いするでチュウ）』

若干聞き取りにくいがよく見ていれば愛嬌もわいてくる。

お母様たちは今日もお出かけのようね。今日はオペラかしら、それともお茶会？まあ、私にはどっちでもいいけど。

朝は基本的にシンデレラが食事の用意をする。まあ、パンと後は昨夜のうちに用意して置いたスープと簡単なおかずのみだ。これくらいは普通にできる。ちなみに私はこの家で誰よりも一番遅く起きる。だって起きれないんだもの。夢の中のほうが幸せなもの！！

「よし、じゃあ私も出掛けてくるわ。」

ある程度の家事を終わらせ、昨日の約束のため出掛ける準備をする。

「お姉さま、お買い物に行くには早くないのです？」

シンデレラが疑問に思ったのか話しかける。確かにいつも出掛ける時間よりかなり早い。でも例の件は極秘だ。王女が町に降りる噂が出ては面倒になるだろう。たとえ相手がシンデレラだろうと他言無言だ。

「ええ、昨日の本の続きが気になって。その本貸し出ししてもらえないのよ。それじゃ行ってくるわね。」

リリアは当たり前障りない返事をして早々に家を出た。

「……いつてらっしゃいませ」

シンデレラはそう一言いい、何も言わず姉を送り出した。

「ここね。『ルノアール』」

昨日この店で11時の待ち合わせだったはず。そう思い中に入った。店はアンティーク使用で可愛く上品な店で雰囲気心地よかった。一つ一つの席がレースカーテンで仕切られ簡単な個室になっている。しかし客は一人もない。入ってすぐセバスチャンとでも言いたくなる初老の男性に話しかけられる。

「カイン様とお約束なさってるお嬢様ですね？」

疑問形で質問されているはずなのになぜか断定しているかのような感じだ。初老の男はにこにこ笑いかけながらリリアの返答を待つ。

「はい。そうですわ。」

男は一層微笑みを深くした。

「お待ち申しあげておりました。お部屋にご案内いたします」

そういい、歩きだしたためリリアも一緒に歩き出す。店の一番奥の部屋まで案内され男は立ち止まる。

男は部屋をノックした。

「はい」

中から声がした。昨日聞いた一度聞けばなかなか忘れられない声が。壁を隔てても分かってしまう。

「お嬢様をお連れしました」

初老の男が答える。

「どうぞ、入ってもらってください」

そう言い、初老の男はドアを開ける。

ドアの先には昨日と違ってフードを被っていない男が、カインシップオートが微笑みを浮かべて立っていた。

第13話 2人の打ち合わせ

部屋の中はさほど大きくなく2つのイスと丸いテーブルが用意されていた。男は椅子を引き私が座ることを促す。

「ありがとうございます」

お礼をいい席についた。カインは微笑んだままだ。正直こういう扱いは慣れていない。社交界にも必要最低限の時しか出ないし、レディ教育も姉ほどしっかりやるうとはしなかった。

初老の男が私たちに向かって一度深いお辞儀をし、そのまま部屋を出ようとす。

まって、行かないで！セバスチャン、2人にしないでっ！！

そんな思いもむなしくドアの閉まる音が異様に鳴り響いた。

「……………」

「フフ。ところで昨日は名前を聞かすじまいだったのでお名前を教えてくださいますか？」

正直カインは昨日のうちに名前など把握済みであるがそんなこと本人の前で言えるわけがない。

「失礼しました。私、リリア＝フォンズと申します。」

そっぴや名前も言ってなかったか？これ失礼に値するのかな？

「可愛らしい名前ですね。リリア嬢とお呼びしてもよろしいですか。」

カインは満天の微笑みで問いかける。

…………可愛い。いくら名前に対してでも免疫がない私は固まって

しまつ。落ち着けリリア！相手は社交辞令とやらを言っているのよ。負けるな。

「光栄ですわ」

頬が引き攣りながらも笑つて返した。多分笑えていたはずだ。例え淑女の微笑みにはかけ離れていようとも。

「あまり固くならないでください。楽にして頂いて結構ですよ。ここには私たちがいませんから」

カインは落ち着かせるように笑顔のまま言う。が、それがあある意味一番嫌なんじゃっ！！と思うが言葉にできない。

「お気づかいありがとうございますわ。でも大丈夫です。さっそくですが例の件の打ち合わせを致しましょう。貴方様もお忙しい御身分でしょう」

失礼な言いかたかな？と思いつつも仕事をしに来たのだからと自分に言い聞かせる。

「・・・そうですね。では始めましょうか」

カインは少し考えてから答えた。今度は笑顔ではなく真剣な顔で

第14話 カモミールの香り

1時間ほどでほとんどの打ち合わせは終わった。町の見学コースはほぼ決まっており、私はその道々の店がなんなのかなどをガイドすればいいらしい。それくらいなら私ではなくてもいいのではないかと思ったが、どうやら護衛につく人や普通の貴族では説明が難しいらしい。また、女の子？の視点でガイドしてあげた方がマリア様も喜ぶのではないかというのがカインたちの考えらしい。

「護衛は騎士団のものがつきますが、実際にマリア様と一緒に行動する兵士はおりません。近くに目立たないように控えさせておきます。そのためあなたとマリア様は姉妹で買い物という設定で動いて頂きます」

「王女様のそばに護衛がいなくてよろしいのですか？」
いくら近くにいてもこころともないのではないか？なんかあった時どうすんじや。責任とれんぞ！

「マリア様は護衛が好きではないのですよ。いつも一緒にいられては息も詰まるのでしよう。城でもよく兵士や侍女をまいては一人で行動するような子ですから。ですから念のため貴女に通信機をつけさせて頂いてかまいませんか？何かあった場合にすぐ対応できるように致します」

おいおい、6歳の子供にまかれるのか。大丈夫かな。まあ、近くににいるならすぐに助けてもらえるか。ずっとそばで監視されているよりいいものね。私的にも。

「わかりました」

「ありがとうございます」

カインがお礼を言うのとほぼ同時にドアがノックされた。カインが返事をするのとセバスチャン（仮）がカートの上にティーセットを用意して現れた。

「そろそろ一度休憩をなさった方がよろしいかと思ひまして」

セバスチャン（仮）はそう言い、なれた手つきでコップにお茶を入れていく。

正直助かった。1時間緊張続きでヘトヘトである。

「ありがとうございます」

そう言うとセバスチャン（仮）は口もとのしわが一層深くなり笑顔をみせた。

用意を終えるとすぐセバスチャンは部屋を出て行った。

私はいい香りに負けすぐにお茶を一口含んだ。口の中でやさしい香りが広がって気持ちよかった。思わず口が緩み「おいしい」と言葉が漏れた。なんていうお茶かしら。

「カモミールティ、ハーブティーの一つですよ」

しまった、口に出てたか。そう思いカインの方に顔を向ける。目線が合うとカインの顔はどこかほっとした様な微笑みを浮かべていた。

「よかった。少しは緊張の糸が緩んだようですね。カモミールの香りはリラクサスの効果があるんですよ。」

あつ心配してくれてたのか・・・この人もセバスチャン（仮）
さんも。それが分かり、なんだがいわゆるれしくって恥ずかしい
気分になった。耳が熱い。おそらく顔は真っ赤だろう。

「ご心配おかけ致しまして・・・」
精一杯で言う。

「ぶっつ。いえ。こちらこそ、ほとんど無理やりあなたを巻き込
だのは私なのに。緊張するなという方が無理でした。すみません」
カイン様は一度噴き出して笑い、すぐに私の眼を見ながら謝罪を口
にした。

カイン様が謝ることがなぜかおかしくって私はとうとう笑ってしま
った。

第15話 楽しい時間と牛以下の男

お茶を飲んだ後は昼時であることもあってそのままそこで昼食をとった。ごはんもすつごく美味しくって、それがまた顔に出たみたいで笑われたけど美味しいから仕方がない。食事中もいろんな話をした。以外にも話は弾んで最後の方には素で会話をしてしまった。

「城や他のパーティーにはあまり参加されないのですか？」

「ええ。あまり派手な場所は好きではないんです。ほら、ああ言う場所ってみんな意地の張り合いだったり、獲物を狙っている眼とか怖くって。」

たまに行くパーティーではみんな自分を着飾って自分が上だと主張したり、イイ男の目に止まろうと必死な感じだ。そりゃあ、自分で相手を見つけようと頑張ることはいいことだ。けどあのテンションに自分についていけそうにない。ちなみに私はいつも姉の引き立て役だからあまりいい思い出もない。

「ああ、確かに。」

カインはなぜか納得した感じで返事をする。城勤めだと役人も立場がいいから大変なのかしら。第一この顔じゃあ相手がほつとかないか。でも一度も噂を聞いたことないな。もしかして貴族ではないのかしら。最初に会った時も爵位を名乗らなかつたし・・・城の役人は実力主義だと聞くし。

実際はカインがリアと同様に面倒であり表に顔を出さなためである。城勤めやそれなりの高位の貴族でなければあまり知られてはいない。

「でも、城の料理は美味しいから好きですよ。」
リリアは本心で答えた。他のところも美味しかったけどやっぱり城の
は一段と違った。特にローストビーフ！パーティでは定番だけどあ
そこのは何か違ってた！どうやって調理してるんだろ。食べた時
の記憶が甦る。そして思い出した。

「ああー！牛君！！すいません！今日は大事な用事があるんで
す。申し訳ないのですが今日はこれで。1週間後またここでよろし
いんですよね？」

どうせ打ち合わせは済んでいる。後は1週間後の本番だけだ。今
はスーパーンお特売に行くことが先決である。

「そうですね。もうこんな時間ですし。」
カインはそう言い、部屋のドアを開けてくれる。そのまま店を出る
までエスコートをしてくれた。

店を出る時セバスチャン（仮）が現れてカインに何かを渡した。可
愛いピンクの袋に入った小さな袋だ。

「これ今日飲んだカモミールティーの茶葉です。よかったら頂いて
もらえますか。」
そう言い私に袋を手渡す。

「いいんですか？」

「ええ、とても気に入ってもらえたようですし、今日はとても楽し
い時間を過ごせたので、そのお礼も兼ねて。」

「ありがとうございます。大切に使用してもらいます。」
実はこの後お店で買おうか悩んでいたところだ。うれしくって笑顔

を持つのは私を知る限り初めての事だ。

モゼフは今だに彼女が出て行った方向を眺めながら笑っている主人を見てそう思った。

第16話 盲点

うふふ・・・今日はいいことづくしね。牛君も手に入っただし。リリアは今日のことを思い出し鼻歌まじりに夕食を作っていた。

「お姉さま何かいいことがありましたの？」

「ふふ。今日はいい茶葉をもらったし、特売品も買えたのよ」

「よかったですわね。わざわざ早くから買い物に行っただかいみたいですわね。」

「え、ええ、そうなのよ」

今なんか棘があつた気がする。気のせいかしら。

「そんなことよりシンデレラ、あなたももう16になるでしょ。そろそろ社交界デビューじゃない？」

今日カインとその話をしていたためなんとなしに言った。

「ええ、けどお義母様たちが許すとは思いませんわ。」

確かにあの人たちはさせそうにない。特にお姉さまは自分が引き立て役になつてしまうから絶対に認めないだろう。16歳にはほとんどの貴族が社交界デビューをするが、しなくてはならない法律があるわけでもない。外に出さなくていいなら出そうとはしないだろう。そうか、問題はここだ。

リリアは『シンデレラ追い出し計画』の盲点に今更気づく。どんなに美しかろうと、それが世間に知れ渡らなければ意味がない。いい金づるが寄ってこないではないか！！なんとかしなくては！！

「お姉さま？わたし別にいたいとも思わないのでかまいませんよ？」
本人もこの調子じゃあ・・・こういつのが宝の持ち腐れ？
兎に角なにか計画を練ろう！！

リリアは新たな決意を胸に秘めて床についた。

第17話 バイトの朝

1週間がたった。最近シンデレラの様子が一段と怪しいが気にしない方向で行こう、身のためだ。

今日はバイトの日だ。いつものごとくお母様たちはいない。

「シンデレラ、チュウ吉、私図書館に行ってくるわね。帰りは夕方になると思うわ」

『あいでチュウ。お掃除してるでちゅうよ!』

「わかりましたわ。あ、お姉さま御髪が」

シンデレラはそう言う私の髪を整えてくれる。いつもはほとんど結わない私だが今日はバレッタを使って少し整えていた。それでも慣れてないせいか、不器用なせいかうまくできず直してもらうはめになった。

綺麗なシンデレラの指が私の髪をすく。シンデレラが綺麗な絹のようなストレートのブロンドに対し私は猫っ毛で赤茶色のどうにもならない天然パーマだ。良くいえばウェーブ。あまりにも差がありすぎたため息一つでない。

「できましたわ。可愛いですわ」

「ありがとう。じゃあ、行ってくるわね」

鏡を見ると再度の髪を編込みして後ろで止めてくれているのがわかった。おお、きれいに結ってくれてる。

お礼を言いリリアは『ルノール』に向かうため家を出た。

『・・・だいじょうぶでちゆか、リリアちゃま。ほんちよはとちよ館に行きゆんだないんでちゆよね？まっつまちゃか男！？ぼくちゆてたれちやう！！？？』

「いやですわ、チュウ吉。そんな無駄なことしか言えないお口は縫って差し上げないといけませんわね。なんでしたら私の髪を糸にして縫って差し上げてよ？一生そのお口が開かないように」
シンデレラは美しく微笑んだ。あまりの美しさに背筋が凍る。

「じっご・・・ごめんなちやいつつつつ！！」

こっ怖いでチュウ。のりよわれりゆう！！後ろ黒いのがいりゆでチュウ。早くかえって来てくれたちやい、リリアちゃま！！

第18話 王女

予定より早く『ルノアール』に入った。まあ、大丈夫だろうと店に入る。

店に入るとセバスチャン（仮）はおらず、黒髪でここらでは珍しい褐色の肌をしている無表情の少年がいた。歳はリリアより少し下に見える。恰好は今時の町の若者ファッションだが腰には剣を携えていてミスマツチ感が漂う。

「リリア」フォンス様ですね」

少年のなんの感情を表さない無機質な声が響いた。

「ええ、そうです」

私が肯定の返答をすると「ご案内します」と一言だけ発し歩き出した。私も後に続く。

そのまま前と同じ部屋の前に付き男が部屋をノックした。

「デイトです。リリア」フォンス様がお着きになりました」

男がまた無機質な音色で言う。デイトといのか、少年。

中から入るよう許可が下りデイトがドアを開けた。

部屋の中にはカインと数人の男がいた。おそらく全員騎士だろう。

おのおの町の商人のような恰好や農作業の恰好、怪しい占い師のような恰好……なぜか踊り子の衣装を着ている人もいる。見た目筋肉マツチヨの男がその恰好をするとキモイを通り越してある意味公害ではないだろうか。

一瞬部屋を間違えたかなあ〜と思いリリアはドアを閉めた。

「リリア嬢、部屋は間違っていますよ」
そう言いドアが開かてる。ドアを開けたのはカイン様のようだ。
ほっとしてカイン様の顔を見る。

「やっぱり踊り子はダメか〜せつかく特注したのによ〜」
声の方に向くと田舎から出てきた小市民です！みたいな格好をした
さっきのマツチヨがいた。なんとももう着替えたのか。いや、着替
えてくれていて助かった。2度と見たくない。

「当り前ですわ、マルク！本当にその格好で護衛するつもりだった
のなら隊長の任を降りてもらうどころかクビにしますわ！！」
可愛らしく幼い声が聞こえた。その声と同時に部屋にいた男たちが
膝をついた。同時に椅子に座っている金髪・青眼の美少女が現れた。
どうやら巨体の男たちに囲まれて見えていなかったようだ。

「うげえ、それは勘弁。今月厳しいんだわ、姫さん」
マツチヨは冗談だつて〜と美少女に訴える。
でも、俺が目立った方が姫さんもあんま目立たないかなあと思った
んだけどなあ〜

マツチヨはブツブツと言いつつ聞いていたがだれ一人耳を貸すものはい
なかった。さっき隊長つて言われていたけどあれが隊長でいいのか
しら。

「あなたが今日私を案内してくれる人ね」
美少女がマツチヨへの怒りを収めて私に向き直る。正面から見る美
少女は凜としていて
実年齢よりも大人びていた。

「お初にお目にかかります、マリア様。リリア「フォンスと申します。王女様の前で正装での拝見ができず不躰ではありますか、本日は貴重なお役目、心して務めさせて頂きます」
私は膝を折り、頭をフル活動させて習った礼儀作法を活用した。緊張して手に汗をかいているのがわかる。

「頭を上げなさい。今日はよろしくお願いするわ」

その言葉を聞き、下げていた頭を上げる。王女の顔を見ると先ほどと同じように凜とした姿で座っていた。だけど違和感があった。

王女のしゃべり方、態度、姿勢どれも完璧だとは思う。王族としての威厳も見られた。しかし王女はまだ6歳の子供のはずだ。喋り方はいいとしても彼女は子供らしい雰囲気をつもっていない。まるでそうであるべきかのようにスキがなかった。

「マリア様、私が今日仕事をさせて頂くにあたって一つお聞きしておきたいことがあります。」

私は思わず言葉を発してしまった。言うてから、しまったと思っただがもう後には引けない。

「なんででしょう?」

マリア様は答える。

「はい。マリア様は町の何をお知りになりたいのでしょうか?」

私がそう言うと部屋の中に緊張感が一気に張りつめた。

第19話 王女の気持ち

私はマリア様が何をしたくて町を見たいのかが変わらなかった。ただ見るだけならカイン様もわざわざ私に依頼などしなかったはず。

「何を知りたい。ですか。・・・私は・・・私は城じゃない世界が見たい」

答えるときにドレスの裾を両手で掴んで言葉を絞り出すかのように、ゆっくりと答えた。

城じゃない世界・・・城での生活はマリア様にとってはすべてなんだろう。あの大きな城、でも小さな世界で彼女は生きてきた。だから町という外の世界を知りたいのだろうか。

そう思うと小さなあの王女がとても可愛らしくて、守ってあげたくなる気分になる。

10年前、シンデレラと初めて出会ったときにそう思ったように。

「わかりました。私なりの方法で精一杯町をご案内させてい頂きます。

楽しい思い出いっぱい作りましょうね」

私はマリア様に笑いかけながら答えた。

「っっん!!!」

マリア様は私の言葉に一瞬呆けた後、大きな目を見開いて答えた。

そう答えたその顔は夢いっぱいいな他の子供たちと同じように輝いてみえた。

「でわ、当初に予定していた観光ルートを変更させて頂きたいのですが、カイン様よろしいでしょうか？」
私はカインに向き直って言った。

「わかりました」

カインは少し考え、答えた。その顔に迷いはなさそうに見える。

「わたしは反対です」

誰かがカインの言葉の後すぐに言葉を発した。そりゃあ、反対する奴もいるだろう。危険度も上がる。けど、私は後に引く気はない。そう思い、反対意見の声の主を見た。

以外？にも隊長とかではなく、あの無表情少年ディオ君だった。

「危険度が高すぎます。当初の予定通りの場所ならともかく、なにかあった場合に対応が遅れる危険があります。」

ディオ君ははつきりと答えた。心なしか怒っているようにも見える。うう、正論だな。

「ディオ……」

マリア様がディオ君の名前を小さくつぶやく。マリア様も危ないこととは分かっているのだろう。

「んまあ、そうなんだがな」

筋肉マツチヨこと隊長が困ったように頭をかきながら言う。

マリア様はそれでも予定通りの観光ルートでいいとは言わない。それならば……

「でわ、あなたが一緒に付いて来て下さい」
私はディオ君に向かってそう答えた。

「仮に何かあった場合、あなたが近くにいれば対応が遅れることのないでしょうか？マリア様もそれならよろしいでしょうか？」

「・・・ええ、わたしはそれがいいわ。・・・ディオ、お願い」

マリア様はディオ君のそばに寄って答えた。美少女（幼女）＋上目づかいだ。これで落ちないのはなかなかないだろう。

「・・・わかりました」

ディオ君はしぶしぶと答えた。無表情だと思っていたがよく見たら違うのかもしれない。マリア様が笑顔満天でお礼を言うと、少し笑っている気がした。

「で、結局どこに行く予定なんだ？」
隊長はどこに行くのが気になるようだ。

「はい、まずは『ストラパ工場』へ行こうと思います」

私のその言葉にまた部屋の中の空気が凍った。

第20話 体験学習

ぐにゅっ・・・

べちやつ・・・

「・・・・・・・・」

「デイト君意外と不器用ね。それに比べてマリアはうまいわ」

「ほんとっ!?!リリア姉さまもとっても上手ね」

私たちは今陶芸体験をしている。『ストラパ工場』とは生活用品などを作る工場であり、他にも輸入物などの取り扱いやいろんなことをしており、男たちが汗水流して働いているところでもある。以外にも東洋からの輸入物の陶芸体験ができるコーナーがある。私も昔食器を安く手に入れるためにここに来てわかったことだ。お年寄りから結構若い人もハマると楽しいと評判だ。作った陶器を持って帰ることもできる。

田舎から出てきた従妹たちを案内する設定のため敬語は使わず会話をした。マリア様も肩の力が抜けたのか普通に話してくれる。

私とデイト君が『轆轤回し』、マリア様は『手びねり』という方法でそれぞれやっていた。初心者の人には職人さんが指導をしてくれる。

「嬢ちゃん、形を作ったら文字や絵も描けるぞ」

職人さんがマリア様の作品を指導しながら言う。

「ええっ絵も描けるの？なに描こうかなあ〜」
マリア様は嬉しそうに考える。

「これやくの？熱いよ！！とけないの？」

エプロンは着けているが手はもう泥だらけだ。顔にも付いている。でもそうなのは気にしないと云うように職人さんにいろいろ聞いていた。職人さんもあれが何焼きの窯だとか、陶芸の歴史がどうやらと話していた。

「・・・ディオ君、一緒に作ってあげようか？」

マリア様は『手びねり』という、形をつくりやすい粘土で作っているため初心者でもうまくできたが、ディオ君は難しい『轆轤回し』のやり方だ。しかも1人でやるうとする。今もうまく作れず恐らく茶碗でも作るうとしていたものがぐちゃぐちゃになっていた。

「・・・大丈夫です。」

ディオ君はそれでも1人でやるうと頑なだ。

「でも、日が暮れちゃうよ？」

ちよつとばかり嫌味に言う。それでも彼は折れない。

「・・・もうすぐ完成します。」

ディオ君は縁がぐにやぐにやの平べったい器を作っている。ちよつと拗ねている感じがしておもしろかった。

「そう？んじゃあ、いいけど。出来たら絵を描いて、後は職人さんに焼いてもらうの。焼いてもらっている間に町でいろんな物を見よう」

私がそう言うとマリア様は笑顔で返事を、ディオ君は少し不貞腐れた顔で返事をした。

……やばい、ディオ君の反応が病みつきになりそうだ。

第21話 タコとマヨネーズ

私たちは職人さんに窯焼きを頼んだ後町の市場に乗り出した。この町の市場は多くの新鮮な食材を置いている。市場は多くの人で賑わっていた。

「リ、リリア姉さま、あれ何！？怪物！？」

「あれはタコという海に住んでいる生き物よ。軟体生物と言って骨がなく、足が8本あるの。大きなものは3m・・・そうね、私の倍くらいの大きさのものもあるわ。敵が近付くと口から黒い液『墨』というものを吐いて目くらましをするの。昔は食べたりしなかったらしいけど、今では市場で手に入るわね」

「・・・食べれるの？」

マリア様は顔が真っ青だ。でも眼はタコにくぎ付け状態である。デイト君も「食べれるの、これ？」といった感じでタコを見ている。

「そうね、あつ、タコを使った『たこ焼き』と言う料理があるわ。とっても美味しいのよ。後で買いましようか？」

「えっ・・・うん」

「・・・食べるんですか」

美味しいのに・・・

マリア様ははじめて見るものに驚き続けている。他にも搾りたてミルク（農家の人が牛と一緒に来てその場でミルクを搾って売る）をやってみたり、干し肉の存在に驚いたりしていた。

「はい、これがたこ焼きです！」

私たちはしばらくして市場を抜け、町の広場の方に向かった。ここらには屋台などもある。

私はそこで3人分のたこ焼きを買って2人に渡す。

「・・・これがたこ焼き？」

「・・・やつ（タコ）はどこに？」

2人は小さなソースのかかった団子を見て言う。

「ふふつ、まずは食べて見て。熱いから気をつけてね」

私は2人の反応が面白くて、笑いながらたこ焼きを口に入れた。

んん〜おひしい〜

私食べたのを見て2人もたこ焼きを口に入れた。

・
・
・

「美味しいっ!!」

「……うまいですね」

2人ともそう一言言つとまた食べた。気に入ったらしい。

「私マヨネーズあんまり好きじゃなかったけど、たこ焼きと一緒に食べると美味しいのね」

マリア様が新発見!とでも言つように言つ。

「マヨネーズはすごいだよ。食べ過ぎると体に良くないけどカロリーが高くて栄養価もいいの。遭難した時や災害にあったときでも飢えをしのぐのに効果的ね!

ディオ君、仕事で遠方に行くことがあったら持っていくといいよ。安いし。あ、でも不衛生な場所に置くとすぐ細菌が繁殖しちゃうよ、気をつけて!」

「……遠慮しときます」

だんだんとディオ君の私を見る目が変人でも見るかのようになくなってきている気がする。

気のせいだよ、きっと。

チョコレートの方がよかつたかな、あれは保存がきくし、非常食にはもってこいだ。

第22話 監視という名の外野

「ああ〜いいなあ〜うまそうだなあ〜」

「うるさいですよ。静かにできないんですか」

少し離れた場所でカインとマルク、数人の隊員たちがばらばらに3人を監視していた。

「だってあいつら楽しそうだぜ？俺も轆轤回してみたいい〜たこ焼き食べたいい〜!!」

「仕事が終わったら勝手に一人で行ってください」

「けっ、冷てえやつ。なんでディオは両手に花なのに、俺の周りにはむさつ苦しい野郎どもと腹黒しかいねえの？俺可哀そうじゃね？」

.....

マルクが言ったその言葉を聞いた隊員たちは同じことを思った。
お前みたいな上司を持つ俺らの方が可哀そうじゃね？

「.....にしてもあのお嬢ちゃん、すげえなあ〜姫さんエライ懐いてるし、あのディオがおさねぎみだぜ？マジでおもしれえ〜」

カインにとって今日のことはいいい意味での予期せぬことだった。最近のマリア様は沈みがちだった。おかげでシスコンのあの馬鹿が仕事をせず、かなりの迷惑を被った。町に行くだけでも気分が晴れるかと思つたが、予想以上のようだ。やはり彼女はおもしろい。

後は害虫駆除のみ……

『伝耳屋』の情報では最近反王族派のやつらが裏稼業の人間と下町で密会をしていたらしい。しかも相手は裏では結構名の知れた暗殺者だ。恐らく広場で何らかの接触をするはずだ。ここは穩便に済ませたいが……

『……着ぐるみを着た人間が接近中』

通信機からディオの声が聞こえてきた。さすがのマルクも真剣な表情になり、状況確認を行う。

『着ぐるみだあ？なんか今日あるのか？』

『はい。町で旅芸人によるショーがあるようで宣伝のようです。現時点での危険行動は見られません。マリア様がショーを見たいとのこと。このままショーの行われる場所に向かいます』

『気をつけるよ。他の奴を先回りさせる』

『はい』

マルクがそう言うつとすぐに2人の部下が姿を消した。腐っても騎士団。仕事は早い。

シヨールがあるという場所に向かうマリア様の姿はとても楽しそうだ。そのマリア様を見ている彼女は温かく、優しい微笑を浮かべていた。

その微笑を正面から見たい・・・なぜかその時カインはそう思った。

第23話 ショータイム

「リリア姉さま、ショーってどんなの？オペラ？踊り？それとも合唱団みたいなの？」

「ふふ、見てのお楽しみよ」

「ええ、また“ふうせん”もらえるかな？」

マリア様はさつき着ぐるみが宣伝のチラシと一緒に配っていた赤い風船を見ながら言う。よっぽど気に入ったらしい。

「ええ、きつとももらえるわよ」

マリア様と他愛のない会話をしているうちにショーの場所についた。小さな舞台のようなものがあり、他にも結構な数の客がいた。舞台の上にはさつきの着ぐるみがいた。どうやらそろそろ始めるらしくパフォーマンズをしている。あんな物を被っているのに足取りは軽やかだ。

着ぐるみが礼をしたのと同時に大きな音があった。

パンツ！！

音と同時にピンク色の粉みたいなものが空に舞う。

花火？かしら？それでも・・・
リリアの考えは途中で中断された。

「リリアさん、その粉を吸わないで！！」

ディオ君の切羽詰まった声が聞こえる。

ディオ君の方を見ればリリア様を守るように抱え込み、口もとを手で塞いでいた。よく見れば周りの人たちがつきつきと倒れていく姿があった。

私も急いで口元を覆う。

「残念。もう一発あるんだ」

そう誰かが歌うような声で囁いた。

同時にリリア様の持っている風船がわれた。

第24話 絶体絶命？

割れた風船から今度は緑色の粉が舞う。

その粉はディオ君と私に降りかかった。その姿をさっきの着ぐるみが少し離れた場所で見ながら言う。

「反応はいいけど残念 もう手遅れだよ。さっきのはただの眠り粉。今度は皮膚で吸収するタイプの痺れ粉。新しく調合させたものみたいでね、さすがの騎士さんも動けないね」

「くつつ………!!」

ディオ君は膝をついて倒れる。それでも腕の中にマリア様を抱いて守っていた。

着ぐるみはゆっくりと近づいてくる。応援はこない。

「応援はしばらく来ないと思うな。他の奴がシールド張ってるし」
着ぐるみが心を読んだかのように話しかけてくる。

まずい、このままでは……

「んじゃあ、お仕事しよう……んぎゃあ!!なんだ、これ前が見えない!あつつ」

プッシュー

その音ともに着ぐるみの顔面めがけて黒い何かが飛んできた。その後何かに足をとられ転倒する。

「必殺！！タコ墨で不意打ち攻撃！」

「タコ墨！？え、何！？あんなんで動けるの！？？」

しびれ粉は皮膚を介してすぐに血中に流れるはずだ。速効性も高い。なのにこの声は姫の隣にいた女だ。動けるはずがない。

「ふっ……私を甘く見ないで頂戴。シンデレラの姉となって10年！この10年何度あの娘に味見と称した毒見……いいえ、あれは完全なる毒！何度死にかけたか。そんじょそこのものが私に効くと思わないで頂戴！！」

「……………」

「……………」

着ぐるみ暗殺者（命名）は無言だ。ついでにディオ君も。

「……あなた、着ぐるみ脱げないのよね？自分がまいた粉がまだ空中にあるから。自分も触れると不味いから脱げないのよね？」

ぎくっつ……………」

リリアは質問するように声をかけるが確信しているかのようだ。と
いうか当たりである。

直接あびるわけではないから効果も薄いだろうが仕事の後逃げるときに命取りになる。しかも速効性がある分長続きしない・・・こんなことなら解毒剤貰っとけばよかった。着ぐるみを脱げない、でも脱がないと見えない!! 着ぐるみ暗殺者はジレンマに襲われた。

「そんなあなたにプレゼントです！」

リリアはそう言うと今だこけて仰向けになっている着ぐるみ暗殺者に近寄り、着ぐるみの頭部を少しだけ開き・・・そして何かを入れた。

「んぎゃあああ~~~~~なっつなんがいる!! ひゅあっつ!!」

「まだまだ新鮮ピッチピッチな、まだこのタコさんですよ。ついでにさっきあなたに墨をかけたタコさんでもあります。いや〜市場は新鮮で安いものが多くていいね。思わずこっそり買っちゃたんだよね。まさかこんな形で活躍するとは・・・ありがとう、タコさん。そしてお元気で。新しい飼い主さんに可愛がってもらうんだよ? 立派な酢の物になるんだよ?」

「だれが飼うか!! って、最後食べるんかい。しかも酢の物!!」

「えっ? 煮物の方がいいって言ってる? でも今日はそんな気分じゃなかったの。ごめんね?」

「・・・根本的に違うと思いますよ」

と言うか、今までどこに隠してたんだ。そのタコ。

ディオ君がしゃべれるようになったのか、はたまたこれ以上はNG
とでも言いたかったのか口を開いた。

「ディオ君、マリア様大丈夫？」

「ええ、眠り粉を吸ってしまったよう……」

ディオ君の言葉は最後まで続かなかった、というか続けられなかった。
私の方を見て眼を見開いたまま固まってしまった。

不審に思い私は後ろに振り向く。

その先には綺麗な緑色の瞳の奥に闇色を宿したカイン様の姿があっ
た。

第25話 警戒音

怖い・・・痺れ粉は効いてないはずなのに体が動かない。初めて会った時よりも数段と・・・

あれ、もしかして私が犯人と思われる？着ぐるみ暗殺者倒れてるし・・・一人で立ってるし・・・

リリアが頭の片隅でそんなことを思っている間にカイン様が目の前まで来ていた。カインの手が頬に触れる。そのままゆっくりと頬を撫でた。

ぼさぼさになっている髪を梳く。今日同じようにシンデレラにされた行為なのに、何かが違っていた。

・・・警報音になる。離れた方がいい。そう思うのに離れられない。

「・・・怪我はないようですね」

たった数秒だったかもしれない。でもなん１０分にも感じられたその行為はカインの一言により中断される。そう言ったカイン様の眼はいつもの綺麗な深い緑色の眼をしていた。

カインが何か呪文のようなものを唱えた。同時に着ぐるみ暗殺者が眩い光のリングに包まれる。

「くっ今度はなんだっ！動けない！」

「大人しくしなさい。あなたのお仲間ももう捕まえましたよ。」

ああ、カイン様は魔法が使えるんだ。

大人しくなった着ぐるみ暗殺者を一瞥した後カイン様はディオ君とディオ君に抱かれて眠るマリア様の方に視線を向ける。

「ディオ、大丈夫ですか？」

「……はい。申し訳ありませんでした」

ディオ君は謝罪の言葉を口にする。マリア様を守れなかったとでも言いたいのだろうか。私的にはディオ君は最善を尽くして、自分の身を盾にしてマリア様を守っていたと思う。でも、それを私が口にした所でディオ君は余計に惨めに思うかもしれない。

「あなたが近くにいたから我々も助かりました。シールドを破るのに少々時間がかかりましたからね……無事で何よりです。リリア嬢あなたにも心からの感謝を……」

「えっいえ、わたしは何もっ……！」

「おいっころら！嘘つくな！！というか、早く中のこれ（タコ）取ってくれっ！」

着ぐるみ暗殺者が余計な突っ込みを入れてくる。

「・・・カイン様、この後この着ぐるみ暗殺者どうなりますか？」
リリアは着ぐるみ暗殺者の言葉を完全無視しカインに話しかける。

「とりあえず黒幕を吐いてもらうまで尋問（拷問）ですかね。その後牢屋かな」

「・・・すぐに連れていきますか？」

「・・・ええ、危険ですからね」

カインはリリアの質問の意味が解らなかった。が、リリアの次の言葉に言葉を失う。

「少し待つて頂けませんか？私もマリア様もショーを楽しみにしてたんです。この人が居なくなったらだれがショーをするんですか！？眠ってるけど他にもお客さん居るんですよ。あの人たちだって見たいから来てるのに・・・ぼったくりもいいところです！！」

「まだ、金は取ってねえだろっ！！状況考えろよ、あんた！」
指名された着ぐるみ暗殺者が吠えるように言う。

「なによっ！あなたこれだけたくさんの人たちが来てくれたのよ。何もせずただ眠って貰いました、じゃダメでしょう！？それにこの人たちが起きた時に寝てしまったことやショーが無くなったことを知れば不審に思つかもしれないでしょ！？あなた責任とれるの！？」

.....

「確かに一理ありますね。」

カインは納得とでも言うつような口ぶりだ。

「じゃあ、みなさんを起こしてショーをしましょうか。できますよね？」

「えっ！？おかしくない？ねえ、おかしくない？？」

俺本当の旅芸人じゃないよ！

そんな着ぐるみ暗殺者の声は届かなかった。

第26話 ショーという名の拷問

「わーすごい！！怖くないのかな!？」

「凄いね！キレイ!!！」

「ママ、あのトラさんカッコいいね!!！」

子供たちの賛美が飛び交う。

舞台上では着ぐるみ暗殺者（トラ人形）が芸をしている。

内容はナイフ投げだったり、火のついた輪に飛び込んだりしている。細かい芸ができないと言うので結構命がけの根性がある芸を選択した。

ちなみになぜか相方は変装したカイン様がしている。ナイフを投げる時なんか凄かった。本当に刺すのではないかとドキドキもんだ。

着ぐるみ暗殺者もギリギリのところまで避ける。

必死に逃げている感じの演技がかえっておもしろかった。

着ぐるみ暗殺者の仲間は裏方で舞台を盛り上げる魔法を使っている。普通の人はほとんど力がないため魔法が使えない。だから町の人は魔法で作ったシャボン玉や花が空から降ってくるのを楽しそうに見

ていた。

「凄い！凄い！！」

マリア様も興奮ぎみに見ている。眠り粉ですぐ眠っていたため何が起こったかマリア様も他の観客も知らない。
それでいいのだろう・・・

ディオ君も立てるぐらいまでに回復し一緒に見ていた。

「・・・リリアさん」

「ん？」

ディオ君が小さな声で話しかけてくる。

「すみませんでした」

「へ、何が？」

意味が解らず思わずそう言った。

「・・・正直あなたのことを信用していませんでした。それなのに、危険な目にあわせて・・・守るところか助けてもらって・・・」

「・・・なんとというか、この場合どうすればいいんだろう。」

真剣な眼差しで見つめるディオ君に私はお願いを言った。

第27話 妹

ショーが終わるころには太陽がだいぶ傾き夕刻を知らせていた。

私たちはそのまま最初の店『ルノアール』に戻る。

「もつと町にいたいな……」

マリア様が小さな声で呟く。しかしそれ以上は何も言わないし、我儘も言わず大人しかった。

ただ、私の手を握る小さな手は朝よりも強い力で握られていた。

「……お疲れ様です。今日はありがとうございました。」

「いえ、私も楽しませて頂きましたから……」

朝と同じ部屋に入ると先に部屋に戻っていたカイン様から労いの言葉を受けた。他の騎士の人たちも数名戻っている。

……なぜか騎士の人たちからの視線を感じるのは気のせいだろうか。

帰ってきてマリア様は私の手を握りしめたまま俯いていた。

「姫さん、今日は楽しかったか？」

マッチョ隊長がマリア様に話しかける。

「……………うん」

「よかったな。んじゃあ、ちゃんとお礼言って、さよならしねえとな？」

「……………」

「……………マリア様」

俯いたまま何も言わなくなったマリア様との視線を合わせるため私は手を握ったまましゃがみこんだ。

顔を覗きこむと大きな瞳から今にも大粒の涙が零れ落ちそうだった。その姿がとても愛おしくなって思わずマリア様を抱き締めてしまう。

「……………りっりリアっがほ……………の……………につ……………」

マリア様はすぐに抱きしめ返してくれた。そのまま泣き出し一生懸命喋ろうとする。

私は抱きしめたまま、一方の手を少しずらして背中を擦りながら言

葉を待つ。

「……………りっ……………リア……………がっホントの姉さまだったら……………よ
かったのに……………」

そしたらずつと一緒に居てくれるのに……………

私は思わず抱きしめる力を強めた。

「……………マリア様、今日作ったコップね、焼くのに時間がかかる
から今日中には持って帰れないんです。だから出来上がったら渡し
に会いに行ってもいいですか？」

「……………うん。」

「よかった。じゃあ、今度は綿菓子を買っていくので一緒に食べま
しょう?」

「……………わたがし??」

マリア様は少しずつ落ち着きはじめ、私の言葉に反応する。

「ええ、空に浮かんでいる雲みたいな形のお菓子ですよ。ふわふわ
しててとっても甘いんです」

「くも……………あまい?……………食べてみたい」

「ふわっじゃあ必ず持って行きましょう」

マリア様から少し元気が戻ってきて思わず笑みがこぼれる。

「……………たこ焼き……………も……………食べたい……………」

「ふふ、気に入りましたね？でもいつぺんに全部食べるとお腹壊しちゃうかもしれませんよ？」

「大丈夫！」

「わかりました。わたがしとたこ焼き、必ず持っていきます」

「うんっ！約束ね！！その時は今日みたいにまた遊んでね！」

「はい、約束です」

私たちは最後に指切りをした。
マリア様の顔にもう涙はない。

「でも、本当にリリアが姉さまだったらいいのに……」

「ふふっ私もマリア様だったらもう一人妹増えてもうれしいと思いますよ」

「リリア妹いるの？いいなあ、マリアもなりたい……ねえ、どんな人？かわいい？」

……どんな人？……人と言うよりか人の皮を被った悪魔なのか？顔は上の上、いや特上だよな。うん。マリア様も美少女だけどマリア様がアウトドア派ならあの娘は完璧なインドア派だろうなある意味ヒッキー（引き籠り）に近い。滅多に家の外には出ないし通販で怪しいものばかり買って人に多額の請求書を渡す。しかもク

ーリングオフができないものばかり！料理をすれば毒になるし、人が作るとやたら注文が多い。洗濯したら服が破れる。掃除をすると物を壊すし、冬は寒いと言って人の布団を奪う。人が借りてきた本を危険物Xにするし……

「……そうですねえ、身内の私が言うのもなんですけどって、もかわいい容姿をしてるんですよ」

あくまで容姿のみで答えた。嘘は言っていない。

「いくつ？」

「もうすぐ16歳になります」

「……じゃあ、リリアもリリアの妹も今度あるお城の舞踏会は来る？」

「……舞踏会ですか？」

お城で近々舞踏会があるのかしら。でも誕生祭でも国立式も時期ではないし。隣国の王族が来るなんてうわさも聞いていない。

「うん。あのね、兄さまのね、『おくさん』を探すんだって」

「へ？」

・・・おくさん？

「・・・マリア様、正しくは『おくさんになる相手』もしくは『結婚相手』です。」

ディオ君が小さな声で訂正してくれた。

第27話 妹（後書き）

更新遅い上に話がなかなか進まずすみません。
それでも最後までやり遂げるつもりです・・・頑張つて。

第28話 おくさん

『おくさん』＝『奥さん』

『奥さんになる相手』＝『結婚相手』

『結婚相手』＝『舞踏会』？

「どうせ数日後には知れ渡る情報だろ。ディオ説明してやれ」

「我が国の第一王子であり、マリア様の兄上でもあられますアルフォード様は今年19歳になられるのですがまだ伴侶となるお方が決まっていらっしゃいません。そのため伴侶となる方を見つけるべく、國中の年頃の女性を対象にした舞踏会が開催されるのです。近いうちにすべての町にこの情報が流れ、リリアさんの家にも舞踏会の招待状が届くと思います」

ディオ君が丁寧に説明をしてくれた。

「……王子様の結婚相手を探すための舞踏会？」

「はーい」

「うん」

デイト君とマリア様が同時に肯定の言葉で答えた。

「……今凄い話を聞いた気がする。王族って普通婚約者とかいるんじゃないの？」

「アルフォード王子は少々女性嫌いな面がありまして今までの縁談を全て断っておいででした。しかし、仮にも一国の王子。ゆくゆくはこの国の王になり、お世継ぎを作って頂ければならない身。事態を重くみた国王たちにより今回の舞踏会が開催されるのです。」

カイン様が付け足しのように私の心の疑問に答えてくれた。

「ねえ、リリアも来るでしょう？あ、リリアが兄さまの『おくさん』になればもつと遊べる？」

「いや、私は……………」

いやいやどう考えても国中の娘が集まるのに私なんぞが王子様のお眼鏡に叶うはずではないか。というか国中ってどんだけの人数だよ。城に入りきらないだろう、絶対。ドレスとか持ってない娘とかどうすんだよ。舞踏会を何日もやったりドレスの貸し出しとかもしてくれるのかしら？いやいや、それはかなりの出費になるぞ。そんなことで国家予算…………私の血税たちが使われるのはいささか許しがたいな。

「……リリア、来ないの？リリアはもう『おくさん』いるの？」
話の途中で考え込んでしまったため話がずれてきた気がする。マリ
ア様がまた眼に涙を浮かべ上目づかい攻撃をしてきた。

「……マリア様、私に『おくさん』はいませんし、それに男性に
対しては『おくさん』であってますが、女性に対しては『旦那さま
です。』」

「『旦那さま』？リリア、『旦那さま』はいる？」

「……いませんね。」

「……残念ながら『旦那さま』になる予定の人もない。

「じゃあ、来るよね！！」

一緒に遊べるよね。そうはしゃぎだしたマリア様に『面倒くさそう
だし、時間のムダだろうから行かない』なんて言えるはずもない。
ディオ君もマリア様に向かって良かったですね、マリア様。リリア
様が来られたらすぐにマリア様のところにお連れできるように配慮
しておきましょう。
つてディオ君、君そんなに強引だったかい！？どんだけマリア様命
なんだよ！！くそいい笑顔だな！

「……いや、まてよ。国中の娘ってことはシンデレラも対象じゃ
ないか……」

これはまさかの玉の輿チャンス！あの美貌を持つてすれば例え王子
であろうといけるはず。

それに王族ともなればあ奴めが多少の散財をしても痛くも痒くもな
いはずだ。王子が気にいってくれれば例えあの物ぐさが嫌がっても
拒否権などない。まさに絶好のチャンスではないか。

神様、これはいつも頑張ってる私にチャンスをくれたんですね！ご
褒美ですよね！！

「ええ、マリア様必ず舞踏会には行きますよ。」

私はマリア様に笑顔で答える。シンデレラ追い出し作戦のために・
・

私は気付かなかった。

そうマリア様と話している姿を、あの綺麗な緑の瞳がずっと何かを
考えるように見ていたなんて

第29話 報酬

あの後すぐ上機嫌になったマリア様たちはそのまま城に帰った。

ただ一人を残して

「ありがとうございます、リリア嬢。あんなに楽しそうなマリア様を見たのは久しぶりです」

カイン様が私の方に向き直りそう放つ。

「いえ、私も楽しい時間を過ごせました。一時でもあんな可愛らしい妹ができたんですもの」

今日のことを思い出して思わず笑みがこぼれた。

「それはよかった。本当はわたしも同席して一緒に町の見物をしたかったんですか………また次の機会にしましょう」

「え？」

カイン様が最後の方になにを言ったか聞きとれず思わず聞き返した。

「いえ、あ、忘れるところでした。例の報酬の品です。どうぞカイン様が長方形の箱を私に渡す。割と大きく両手でその箱を手に

取った。

「え？あ、私も忘れてました！」

「ふふ、中身があっているか確認して下さい」

そう言われて箱の蓋を開ける。中には間違いなく『目指せエクソシスト！今日からあなたも悪魔払いができる！！』と書かれた本が入っていた。

「ありがとうございます！・・・あれ？」

私は手に本をとりカイン様にお礼を言った。が、本をとった箱にまだ何か入っているのに気づいた。これもまた小さな長方形の箱でこちらは綺麗にラッピングしてある。

「・・・カイン様、これは？」

私は手に取りカイン様に聞いた。間違えて入ったものかな？

「開けてみてください」

カイン様は笑顔でそう一言放つ。不思議に思いながらも言われた通り箱を開けた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・きれい」

思わずそう一言もらした。中には小さな雫の形をした蒼い色石がついたネックレスが入っていた。

「わたし個人から今日のお礼をこめた物です。受け取って下さい」

「……え？カイン様から？」

嘘、なんで？こんな高そうなもの。いつたい……

「だつ駄目です！こんな高そうなもの！！」
全力の声で言い放った。

「気にいって頂けませんでしたが……」
カイン様はがしょんぼりとした顔になる。

な、なんでそんな顔するのよ！気にいる、気に入らないの問題じゃないのよ！！

「いやっ！そうじゃなくて……あの、すごい綺麗で……」

「気にいって頂けました？」
真顔で聞かれる。

「ええ、すごく……」

個人的にはすごく好きだよ。ああいうの。普段はあんまりしないけど素直にあれはいいな。着けてみたいな〜と思うよ。でも、今はそ

んなこといいたいんじゃないか……

「……………よかった」

カイン様はほつとしたように微笑んだ。なんでそんな顔するの!?

そのままカイン様は私の近付き、私の持っているネックレスを手に取った。そしてそのまま……………

「……………よくにあいます」

カイン様はネックレスを持ったまま、私の首元に触れ、気付いた時には私の首にはさつきまで持っていたネックレスがついていた。その時見たカイン様の顔は今までにない、とろける様な笑顔だった。私ができるかチョコレートなら間違いなくあの笑顔で原形を留めることができるか……それくらい凶悪……………美しい微笑だった。

第30話 親と子

予想以上に帰宅が遅くなった。あの後どうやって家まで帰って来たか覚えてない。気付いたら家の前であたりはうす暗くなっていた。だが今のリリアにはさっきまでのことを思い出す気力もなかった。

いつもよりだいぶ遅い時間に帰ることになってしまった。不安を抱きつつ家に入る。

「……………ただいま」

「あら、リリア。こんな時間まであなた外に居たの？気付かなかつた。信じられない、共もつけずに淑女たるものが外出なんて。まあ、あなたのその容姿格好じゃねえ」

「……………マリーお姉さま、帰ってらしたの」

珍しくお姉さまが先に帰っていた。最悪だ。

マリーお姉さまは私とは違う茶髪の艶やかな髪にシンデレラよりは劣るが社交界でも華となる容姿をしている。若干性格の悪さが顔に染み出てしまっているが……………でも今日は機嫌がよさそうだ。

「ええ、つい今しがたね。今日はレイモンド伯爵家のお茶会に行っていたの。ご子息に気に入られてね。まいっっちゃうわ、あの容姿で私に釣り合うと思ってるのかしら。でもまあ、センスはいい方なのよ。見てよ、このネックレス！美しい私にお似合いよ」

「……はあ。マリーお姉さま以外に似合う人はなかなかいないでしょうね」

……というかあんな金ぴかでゴテゴテしたものなかなかないよ。いろんな石が入っているみたいだけど、いろんな（石の）色が混ざって気持ち悪いよ、正直。

そんな私の気持ちなど露知らず、お姉さまは上機嫌のようだ。

「……リリア、帰ったの？」

その声に一気に緊張が張りつめた。手足が冷たくなるのを感じる。

「……お母様」

姉と似た容姿に、もうそれなりの歳のはずなのに年齢を感じさせない色気を漂わせた母親が立っていた。

「……また図書館に行っていたの？いい加減レディとしての自覚をもつたらどうなの。あなたはマリーと違って人の何倍も努力しなきゃならないのよ。こんなじゃおちおち社交界にも出せないじゃない」

「……ごめんな」

ああ、この人のこの一言で今日の楽しかった気分を全部忘れそうだ。まるで役立たずとも言われている気分になる。お姉さまとは正反対の自分……この人にとって私は……

「お義母様、食事の用意が整いましたわ」

私とお母様の話を遮るようにシンデレラが現れた。

「……今、なんといった？私の聞き間違えでなければ『食事の用意が整った』って言ったような……まさかね、そんなまさか。」

「リア、いつまでそこにいるつもりなの。早く来なさい」

母親が再度呼びかけるまでリアはさっきまで気分が滅入っていたことも忘れシンデレラが放った一言に思考を停止していた。前を歩くお母様たちに今日のは自信作だと笑顔で話しかけるシンデレラは何故か輝いているように見えた。

嘘だと言って……

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうぞ、召し上がって下さい」

私たちは食事のため各々のいすに座った。シンデレラは共に食卓をすることを許されておらず、給仕を行うことが暗黙の決まり事だ。ここにこと笑顔で私たちの目に前に食事が並べる。天使のような顔で並べる食事はまるで食べれば最後、昇天できるような品物だった。さしづめシンデレラはこれから天に召させる私たちにたいしての神様の使いか、はたまた、天使の皮を被った死神か。どっちかかっていうと後者が。

「・・・・・・・・シンデレラこれはなんですか」

「まあ、お義母様、見ての通りスープですわ」

スープ・・・・・・・・これが！？紫色と黒が混ざったような色のどろどろした物体が！

「・・・・・・・・これはなんですか？」

「それは若鳥と野菜のホイール蒸しですわ。お義姉さま、美容に気を使っていらつしやるから・・・・・・・・鳥の皮には美容成分が含まれているらしいんですよ」

いやいやいやいや、鳥の口の中にホイルと野菜が入ってますけども！普通逆だよね！！可哀そうなことになってますけども！！最近やつとまともな卵焼作れるようになったばかりだろうが！

「あ、私今日ヴェルディア卿に食事誘われていたんでしたわ！！急いで支度しないと！！お母様、よろしいですわよね？」

「ええ、ヴェルディア卿とは親しくしておいた方がいいでしょうから。私も今後のため同席するわ。リリア、貴女は来なくていいわ」

そう、早口に2人はいいすぐに馬車を呼んで家を出て行った。ヴェルディア卿がどんな人であれ、あの2人の餌食になるのかとおこうと少し同情してしまう。きつと貢ぐだけ貢がされてお払い箱だろう。いつものように。

「まあ、せつかく腕をふるって作りましたのに・・・」
シンデレラがしょんぼりとした顔で言い放った。
どう作ったらこうなるのか。でも珍しくしょんぼりした顔とさつきお母様との間に入って助けてくれたことを思い出し思わず言い放った。

「・・・私が食べるわよ、せつかくの食材がもったいないじゃない。ほら、あんたも座って一緒に食べるの」

私もつくづく甘いな。そう思いつつシンデレラは座るのを待った。

いただきます・・・そう言い、私は勇気を振り搾って紫と黒のコントラスのスープをスプーンに掬う。大丈夫！きつと紫芋のスープよ、芋が入ってるから多少どろどろしているだけよ！・・・そう自己暗示をかけて口に運んだ。

口にいった瞬間舌から全身に向かって激痛と痺れがきた。今日の痺れ粉なんて比ではないぐらいの・・・あまりのことに私はそのまま気を失った。

ああ、やっぱり……頭の片隅でそう思いながら私の意識は途絶えた。

第31話 後遺症か呪いか

あの日から丸3日がたった。次の日に目を覚ました時はあの娘が作った食事の後遺症から来る妄想とさえ思ってしまった。

けど本と・・・ネットレスの存在が現実であったことを物語ってくれた。

あの日から私はのんびりと毎日を過ごしている。

蒼い空、輝く太陽、心地よいそよ風、木陰の下で大好きな本を読む最高のひと時・・・ああ、なんて幸せなのかしら。時が止まってくれたらいいのに・・・なんか大事なことを忘れてる気がするけどまあ、いいかあゝ気持ちいい

「・・・さま、お姉さま、起きて下さい」

・・・んぐだれよ、私の至福の時を邪魔する奴は。

「・・・お姉さま、早く起きないとお義母様たちが帰って来ますわよ? いいんですの?」

・・・ん? お母様?

「・・・うわっ! うそっ寝てた!?!」

「はい。とつても気持ちよさそうに」

うわゝ余りに気持ち良くてそのまま木陰の下で寝ていたのか? 太陽が大分傾いて来ている。相当寝てたわね・・・

「ありがとう、急いで食事の支度するわね」

リリアはシンデレラにお礼を言い、身体を起こした。

今日の夕飯はなににしようかしら……

「お手伝いしましょうか？」

シンデレラが珍しく自分から手伝おうとしている。が、しかし……

「……気持ちだけでもらつとくわ」

そう言い、リリアは料理のため台所に足を運んだ。

3日前の夕食を食べ再認識した。こいつは台所に立つ人間ではない。料理することがもはや犯罪だ。あの料理を食べて丸2日舌は完全に逝かれ、思考能力が著しく低下した。卵焼くのに10年かかったがその卵焼きもやつと人間が食せるレベルに達したばかり……後10年たつたとしてもこれ以上の改善を認めるとは思わない。我が身、そして他の人のためにもあ奴めが食事を作るなどということをしてはなくてよい環境にならなくては……。そのためにも早く嫁ぎ先を決めて……

バタンツッ！

「リリア！シンデレラ！！いないの！？」

……どうやらマリーお姉さま達の御帰還のようね。まあ、食事の用意も出来ているし、でも、今日はえらい興奮気味だな。

「お姉さま？私はここに居ます。どうかなさったんですか？」
マリーお姉さまはかなり興奮した感じで話しかける。

「もうっ！どうしたじゃないのよ。その様子じゃ知らないみたいね。ねえ、今日の郵便物はどこ!？」

「マリーお義姉さま、おかえりなさいませ。郵便物でしたら居間のテーブルの上に置いてありますわ」

シンデレラがそう言うとマリーお姉さまはすぐに居間の方に早足で向かう。

なんだと言うのだ、郵便物が。……郵便物？

『我が国の第一王子であり、マリア様の兄上でもあられますアルフォード様は今年19歳になられるのですがまだ伴侶となるお方が決まっていらいっしょいません。そのため伴侶となる方を見つけるべく、國中の年頃の女性を対象にした舞踏会が開催されるのです。近いうちにすべての町にこの情報が流れ、リリアさんの家にも舞踏会の招待状が届くと思います』

私を選んでくれるかしら・・・」

マリーお姉さまは招待状を胸に抱き頬を染めている。

「マリー、国中といっても王妃にふさわしい娘はあなたしかいないわ。これほどの気品と美貌があるのですから」

「そうねっ！そうに決まってるわ。私ほど王妃に相応しい人間など他にはいないわ。アルフォード王子も私に会えば一目でそう気づくに決まってる！！ああ、でも舞踏会までにもっと美しくならなくては！！！」

「まあ、さすが私の娘ね。ドレスも新しく新調して最新の流行のものにしくはダメね。宝石も、靴も新しく用意しなくては・・・」

「お母様、エステの回数も増やさなければいけませんわ！私の美しさをより引き出さなくては！！！」

「まあ、そうね。やることがたくさんあるわ！！舞踏会はいつなの？」

「ええっと・・・2週間後ね！いやですわ。もう余り時間が・・・」

お母様とマリーお姉さまは私たちの存在など忘れ2人で盛り上がっていた。なぜ、あそこまで自信があるのか・・・というか最悪だ。赤字だ、大赤字だ！！新しいドレスに宝石、エステに・・・他にも美容のためにあの人たちは家のお金を湯水のように使うんだ・・・

……もう削れることはないのに！

「まあ、お母様、これご覧になって！リリアのはまあはいいとして、シンデレラにも招待状が届いていますわ！！」

「まあ、なんてこと」

お姉さまの手には自分宛以外の招待状が手にしてあった。そこには『リリア』、『フォンス』、『シルヴィア』、『フォンス』と書かれている。

……なんてことって。国中の年頃の娘全員に配られるんだって！届いて当り前じゃないか。住民登録してるでしょうがっ！！しかし、これはまずい。お姉さたちより先にあの娘宛ての招待状を隠しておかなければいかなかった。シンデレラ宛ての招待状を見たらあの人たち……

「ふんっ！あんな小汚い娘には必要ないわ！！」
マリーお姉さまはそう言い、招待状を自分の手でビリビリと破り最後には火のついた暖炉の中に放り投げた。

ああ
.....
終わった。

第32話 純粋な少年

はあ――

はあ――

はあ――

「……………リリアさん、何かあったんですか？」

「えっなんで？」

「……沈んだ顔で何度もため息ついてるじゃないですか」

「あ〜ごめん。ちょっとね……」

私とディオ君は本日再度下町を歩いている。今回も彼は今時の若者ファッションだ。剣はないがどこかに隠し持っているかもしれない。これから一緒に買い物をしてマリア様に会いに行く予定だ。ディオ君は今日午後からマリア様の護衛らしく私を迎えに来てくれた。わざわざ休みの時間に申し訳ない……

ああ、でも本当にどうしよう……

リリアは昨日起きたことを思い出していた。

優雅な？ひと時を過ごしていたのに最後は燃えた招待状と一緒に灰になった気分だ。お母様もシンデレラの招待状は最初から不必要だと言っし、本人に至ってはショックどころか招待状がないのなら行く義理も義務もないと笑顔で答える始末……

「ねえ、ディオ君。ちょっと聞きたいんだけど………舞踏会って招待状がないとやっぱり入れない？」

駄目もとでディオ君に聞いてみる。

「？はあ、一応あの招待状が入場チケットのようなものですから……リリアさん招待状届かなかったんですか？」
ディオ君は不思議そうに話す。

「んー実は届いたんだけど紛失？しちゃって……」

紛失というか消滅？帰らぬ人？

「それは・・・舞踏会は難しいですね。あ、でもどうせリリアさんはマリア様に会う約束なので当日わたしがお迎えにあがってそのまま城に入りますか？だったら招待状がなくても城に入れるし、マリア様にお会いした後舞踏会に出れると思います・・・」

「まあ、マリア様がリリアさんを離してくれるかわかりませんが・・・」

「いや、招待状がないのは私じゃないの。妹なの」

デイオ君の気遣いに感謝しつつもその提案は難しい。母と姉の手前一緒に舞踏会に行かなければなるまい。お母様は私に期待などしていないがそれでも世間体もあるし、実の娘でもある。お姉さまに至っては今度も私を引き立て役に使おうとするはずだ。まあ、最初一緒に居れば後は適当に抜けてマリア様と遊びつつ影からシンデレラ玉の輿計画を実行する予定だった。

「妹さん、ですか？」

「うん・・・あ、私の招待状を妹に渡すことはできないのかな？あの招待状1人1人に名前入っているから駄目かな。最悪私は仮病でも使って行かないようにしてあの娘に行かせるのはどうか。さつき言っただみたいにデイオ君をお願いしてマリア様にだけ会いに行くのはどうだろう。舞踏会には出なくても別にいいし。」

「リリアさんって妹さん思いなんですな」

デイト君が感心くと言つ感じで言つ。まあ、普通に考えれば自分に届いた招待状、それも城からのをわざわざ人に渡す人間もそうそういるまい。

が、

.....

ん？妹思い？

.....やばい、今鳥肌立った。

別に妹思いなわけじゃ.....むしろ反対で妹を家から追い出した
いから舞踏会で王子様に見染められて結婚でもしてくれないかな
という、はつきり言つて邪悪な？心？しかないのだが.....まあ、
そんなことデイト君に言えないが。

「.....いや、まあ、あの娘、まだ社交界に出たことなくつて.....
折角だからお城での舞踏会をデビューにさせてあげればなんて.....
思つたり？」

うう、あまりに疑われなさすぎて心苦しい.....ごめんね。

「でも招待状を他の人に渡すのは王家に対して不敬に値するかと.....

・・・」

ああ、やっぱりそうだよな。普通考えないよね。

「・・・でも一番の問題は他にもリリアさんとは違う意味で他の人から招待状を貰って舞踏会に参加する人がいる可能性があることですね」

「・・・えっ？どういうこと？」

デイオ君の言っている意味が解らなかった。でもデイオ君は神妙な顔つきになって考えている。

「・・・ここでは話にくいのでどこか入りませんか？」
そう言う彼の言葉に頷き、私たちは手短な店に足を運んだ。

「・・・で、どういう意味なの？」
身近なカフェの最奥の席に座り、注文した飲み物が来た時点でそう話しかけた。

わざわざ人気の少な暗く最奥の人が少ない席を選んだのだ。きっとあまり聞かれくない内容だろう。

「今回招待したのは国中の年頃の娘だというのはご存知ですよね」

私はその言葉に頷く。

「年頃といつても王子の年齢に合わせ下は16歳、上は確か22歳までだったかな？まあ、22歳までに結婚していない女性は少ないからほとんどが10代後半の女性ですね、後は当然ながら既婚者、貴族の場合は婚約者がいて結婚することが決まっている場合、修道女などは最初の時点で選別させ招待状が送られないことになっています。招待状が届いても恋人がいた場合や他の理由でも舞踏会は強制参加ではないので来ない人もいるでしょう。しかし反対に参加したくても年齢や他の理由で招待状が送られない方もいます。その方々からすれば喉から手が出るほど招待状は欲しいものだと思います。例えば身分を偽つてでも……」

そうか、シンデレラはもうすぐ16歳になるけど今年中に16歳にならない子は強制的に参加できないんだ。他にも婚約者がいる場合は参加できない。普通の女の子なら参加したいはず……特に貴族なら婚約者がいようと舞踏会に参加し泡良くは王妃の座に就こうと考えるかもしれない。

「招待状がなければ舞踏会に参加できない……裏を返せば招待状があれば参加できる。城では招待状を持って来た人が本当に本人か確かめる術はありませんから」

「……つまり誰かのを奪つてでも舞踏会に参加する人間がいるってことよね」

デイト君は頷く。

「一番危険なのは王家を害する人間がその招待状を手にした時です」

「……もしかしてこの前みたいに暗殺者が紛れ込む可能性が高いとか？」

また頷かれた。

「つてやばいだろ！！王様もそんな危険なことなんで考えたかな。もう普通にお見合いでもさせればよかったのに……。ああ、普通に行きたくなくなってきたな。あれ？」

「ねえ、じゃあマリア様も危ないじゃない!？」

この前命狙われたばかりだよね！王族つて！ちよつと王様可愛い娘が危険に晒されてもいいの!？」

「マリア様も危険ですが一番の狙いはアルフォード王子です。前回マリア様を襲ったのもアルフォード王子への脅しかと。元々アルフォード王子はあまり表舞台に出ない方なので。まあ、この前の一件で反王家側の人間はほとんど根絶やしにできたので危険は少ないはずですが万が一がありますから……」

「……というかデイト君、こんな重要な話、私聞いてよかったのかな？」

これ、結構とういかなかかなり内部的な話だよな？聞いたら不味くない????

「リリアさんはこの前の一件にも関わっていますし、マリア様の大切なご友人でもあります。話しておいた方が後々の為にもなると思

いますし……この前の一件のようなことないとは思いますが、このことを聞いて不安になれば当日出席しないという手もあります」

「えっ？」

どういう意味……

「必ずしも安全とは言いきれないと言うことです。当日マリア様と親しくしているのを見られたら貴女に被害が及ぶ可能性があります。マリア様もリリアさんが怪我をするかもしれないと知ったら納得してくれるはずです」

真剣な表情で私の眼をまっすぐ見ながらそう言う。心配してくれているのだろう。この前のようなことが起きるかもしれない。この前のように運よく相手のスキをついたり、すぐに誰かが助けられるか解らない。だから大事な内部情報をわざわざ教えてくれたのだ。その心遣いに心が温かくなった気がした。純粹で心優しい……でも……

「ありがとうございます……でもディオ君私のこと甘く見てるわね。私ね、危険察知能力と逃げ足には自信があるの。この前も大丈夫だったでしょう？」

「……危険察知能力ですか？」

ディオ君がなんだそれ？とも言いたいのだろう。少し眉間に皺を寄せた。

「うん。だからもし仮に前と同じようなことあったとしても大丈夫だよ。なにかあればすぐに逃げるよ。またタコさんを常備しておくのもいいかもね。あ、防犯用のベルも持って行こうか。それに優秀

な騎士団の人やディオ君もいるしね。だいたい私将来はのどかな場所できつくり自然と戯れながら老後を過ごすのが夢なのよね、家庭栽培とかしてさ。だからその夢叶えるまでは死なない、てか死ねない」

そう、何時か必ず手に入れて見せる。平凡な日常。穏やかに過ぎて行く時間の中、私でもいいって言うてくれる平凡な夫と出会い、やさやかな幸せを噛み締めながら2人で手を取り合って生きて行くの。「君の家庭的なところが好きだよ」とか「一緒に立派な畑を作っていこうね」とか「平凡な君と僕、とつてもお似合いだと思わない？一緒に平凡な毎日をエンジョイしようぜ！」とか言うてくれる人・
・ああ、なんて素敵。

動物を飼うのもいいな・・・チュウ吉ぐらいなら一緒に暮らせるわね。あの子はいい子だし、もう愛着がわいちゃってるし・・・ネズミって長生きできるかしら。

そして子供を授かってその子供が成長していくのを微笑ましく眺める・・・

きつと途中で反抗期なんか迎えるんだろうな、でも最後には「お母様、僕お父様の後をしっかりと継いで立派な伯爵になるよ」とか言うてくれる。女の子だったら一緒に料理したりして・・・最後はその子供に家を任せて夫と一緒に静かな場所に隠居。ああ、なんて幸せな私のライフプラン！！

「・・・わかりました」

全力でマリア様とリリアさんをお守りします。

ディオ君はそう言うてくれた。

「うん。お願いね」

と私も言った。たはいいが問題はシンデレラの招待状の件だ。さてどうするか……

第32話 純粋な少年（後書き）

ライフプラン・・・叶えるために必死なリアです。
読んでくださっている皆様、本当にありがとうございます。

第33話 天使

「リリアっ!!」

小鳥のような声、笑顔でこちらに向かってくる姿はもう天使といつていいほど可愛い。

「マリア様!」

すぐには私の傍まで来て思いっきり抱きついてきたマリア様は嬉しそうに話しかけてくれる。

「ほんとに来てくれた! 会いたかったのよ、ずっと待ってたんだから!!」

上目づかいでそんなこと言われたら・・・ああ、私の性別が男だったなら完全に今のでノックアウトだ。可愛いなんてもんじゃない。くっシンデレラを見た後にマリア様を見たらもう・・・あ、やばい涙が・・・

「ふふ、ありがとうございます。私もお会いできる日を楽しみにしております」

私はマリア様に目線を合わせる為に腰を折り言葉を返した。

今私はなんとも凄いことにお城の中にいる。しかも王女私室だ。今までの私なら想像もできなかったらう。まあ、正式に王家に招待された訳ではないからこそりとだけど・・・だって貧乏貴族の次女が王女と普通に会うなんてできないし、もし入れてもそれが他

人に知られるのは厄介だ。一番姉に知られたくない……私は平和が好きなんだ。だから私のことを知っているのはマリア様とディオ君を含む一部の騎士団の人達、そして……カイン様。

「……ア、リリアっ！」

「っはい！」

「?どうしたの、リリア？」

「なんでもありませんよ。ちょっと考え事してしまつて……あつマリア様、はいこれ！」

「?なあに？」

私はマリア様に小さな長方形の箱を差し出した。私が持っている分には結して大きくない箱ではあるが幼いマリア様が持つと結構な大きさに見える。不思議そうに箱を眺めるマリア様に私は開けてのお楽しみです。と言い小さな手で箱を開けるよう促した。

マリア様は訳も解らぬまま箱を開ける。そして……

「わあっ!!!リリア、これ!あの時の!？」

「はい。マリア様が一生懸命作ったコップ(湯飲み)です。今日出来上がったばかりなんですよ。少しでも早く渡したくつて。どうぞ、綺麗にできているでしょうっ？」

「うん……うんっ。つつつつつ凄く綺麗!! 凄い、本当に？ わあ、マリアが描いた絵もちゃんとあるっ！」

「ふふ、よかった。マリア様の最高傑作ですもの。工場の職人さんも上手って褒めてくれましたもの」

「うんっ！」

職人さんに褒められた時、マリア様は本当にうれしそうだった。やっぱり子供は笑顔が一番よね。

「ねえ、リリアやディオのはあるの？」

「……………」

マリア様の純粋な疑問に私と密かに部屋の隅で身を潜めていた（護衛）ディオ君は固まった。

「……………あるにはあるんですけど……………」

私のはいいがディオ君の作品はお世辞にも上手いと言えない……ディオ君も今は顔には出していないが最初一緒に工場に物をとりに行った時自分の物を見てなんか沈んでいた。気がする……まあ、初心者には難易度が高いし仕方ないんだけど、見せたくないかも……

「実は私、人にプレゼントするので今はお見せできないんです」

私はとっさに答えた。

「プレゼント？」

「ええ、お世話になっっている人に贈ろうかと……」

「私も日ごろの感謝を籠めて渡そうかと思ひまして」

ディオ君も話に乗ってきた。よっぽど見せたくないとも見える。

「そっかゝ残念。リリア、誰にあげるの？」

「……いや……あの、その……」

渡そうかなって思っている人はいるけどその人の名前なんて下手に言えない。相手に喜んでもらえるかも解らないし、ましてその相手に今日会えるかなんて絶望的だ。

「あ、リリアさん、そう言えば招待状の件……」

意外にもディオ君が話題を変えてくれた。

「招待状？」

マリア様が不思議そうに聞き直す。

「はい、リリアさんの妹君が招待状を無くしてしまったらしいんです。妹君を舞踏会に連れて行きたいリリアさんがそのことで悩んでいます……妹君が行けないのに自分が行くのはと……」

ディオ君、話題変えてくれたのはいいけど今その話しないで。古傷に塩塗らないで！今はマリア様に癒されたいのよ。少しの間でも臭いものに蓋して考えたくないのよ！

ってか話が美化される！美化されすぎだよ、ディオ君……！

「んーじゃあ、もう一回招待状を渡せばいいのよね？簡単じゃない」

いやあ、渡してもらえるんならね？流石に無理でしょって簡単！？

「……マリア様？今……」

マリア様の言葉の意味が解らず思わず聞き返す。

「招待状があればいいんでしょ？もう一回作ればいいのよ」

そう笑顔で答えるマリア様。

作る？招待状を？もう一回？

えっ????????????????????どういうこと!?

「マリア、お兄様の直接お願いしてあげる！お兄様がいつていつたら招待状の一つや二つ簡単に手に入るわ。大丈夫、お兄様舞踏会は嫌がってたけどマリアにはとっても甘いよ。安心して」

「でも、そんなこと……マリア様、お気持ちだけで十分ですわ」

いくらなんでもそんなことお願いできない。そんなこと言って下手に目を付けられるのも嫌だし、何よりマリア様を利用したことになる。この幼い王女には誠実でいたいと思う。あの日初めて会った日に両手を握りしめながら答える姿を見てそう思った。

「いやっ！だって無いとリリア来ないんでしょう？そんなの絶対いやっ！それともリリア、マリアのこと嫌いなのか？」

美少女（幼女）＋上目づかい＋涙目・・・つく、美形慣れしている（主に妹、最近はカイン様も）私でもキツイっ！！ぎゅって抱きしめたい！ほっぺぐりぐりしたい！！

「まさかつ！マリア様のことは大好きです！でも私、マリア様にこんなことお願いするために今日来たわけじゃないんですよ？マリア様に会いたくて来たんですよ？」

「・・・大好き・・・マリアに会いに来た・・・
マリアもリリア大好き！！」

マリア様がまた抱きついて来て力一杯答えてくれた。
私も背中に手を回して抱きしめ返す。

「でもね、リリア、やっぱりマリアお兄様をお願いするわ。リリアのためじゃなくてマリアのためにするのよ？だから・・・舞踏会に来て？」

「・・・わかりました。でわ、お願いします。マリア様、本当にありがとうございます」

結局私は折れた。マリア様には頭が上がらない・・・

「よかったですね、リリアさん」
ディオ君、もしかしてわざと話ふってくれたのかな……まさかね……

「あ、大変！もう一つ忘れてた。はい、マリア様、ご所望のたこ焼きです。少し冷めてしまったけど美味しいと思いますよ」

「うわあ、たこ焼き！！やった〜ずっと食べたかったの」
マリア様の目はキラキラと光っていた。

「ディオ君も一緒に食べよう、ちゃんと3つ買って来てるから」

「……しかし職務中ですし……」
そう言いつつその目は欲しがっているな、ディオ君。顔に出してないつもりだろうが目が輝いておりますよ？まったく真面目というか頑固というか……

「もう、ディオったら！命令です、一緒に食べなさい」

マリア様はが頬を膨らませてちょっと怒った感じで言う。

「……わかりました。頂きます」

そう言つて3人でテーブルに着き、たこ焼きを食べながら楽しいお喋りを3人で始めた。

ちなみにこの後もう一つ約束していた『綿菓子』を出し、興奮する
マリア様に原材料が飴であることを説明すると

「えっ！？アメ？アメってあのケーキとかの上に乗っているやつのこと??？」

と驚かれ、少し悲しくなった。

だって飴細工なんて庶民派の私は普段お目にかかれないんだもん・
・

最近では庶民の洋菓子店でも飴細工の乗ったケーキを売っている所
もあるがその洋菓子店すらあまり行かないリリアはそんなこと知る
はずもなかった。

第34話 シスコン

夜も深けた時刻、広い部屋の中に1人の男がいた。男は机に向かい黙々と書類に目を通していた。

コンコン

「……………なんだ」

戸を叩く音が静かな部屋に響く。同時に外から声がした。

「職務中失礼致します。第一王女就き護衛官ディオゥエンドランドです」

無機質な声でそうディオゥエンドランドは言った。

中から入れと命じられてから部屋に入る。部屋の中には中央の椅子に座っているこの部屋の主と2人の護衛官が入口で待機していた。部屋の主は目線だけ向け冷たい音色で命令する。

「……………ディオと2人で話す。他は下がれ」

部屋の主はそう言うと同時に部屋にいた2人の護衛官は一礼をして部屋から出て行く。完全に部屋から2人以外の気配がなくなったのを確認し、男は再び言葉を発した。

「ふう〜〜〜まったく堪ったもんじゃないよ」

「……よろしかったのですか、護衛官を下がらせて」

「いいよ、いいよ。だってあの護衛官、名ばかりのあいつが寄りこした監視だからね。サボリ防止の。それに自分の身ぐらい自分で守るさ」

「しかし先日の件もありますし、十分に用心した方がご自身の為かと」

「何か起こるとしたら次は舞踏会だろう。この前の一件であちら側も下手に動けない。あいつもそうわ解ってる……マリアを危険な目に合わせたんだ。次は完全に潰すさ。そのために舞踏会なんて下らないもの許可したんだから。で、ディオお前の用事は？」

そう発する顔は怒りに満ちていることが解る。

「はい。その舞踏会の件でマリア様がお会いしたいとのことです。自室でまだ眠らず待っていらっしやいます」

「なっまだ起きてるだと！もう夜の11時だぞ。マリアはまだ6歳の育ちざかりなのに夜更かししてっ、それに睡眠不足でマリアの玉のような肌に悪影響を及ぼすかもしれんだろ。ディオ、なんで寝かしつけてないんだ。侍女も何をしている!!」

「……恐れながら、マリア様は多忙の身の殿下の職務を邪魔するのは申し訳ないとおっしゃりまして。殿下の職務が終わられるのを待って御逢いする予定ではあったのです。しかしもう流石にマリア

様も睡魔と闘いきれないようなので僭越ながら自分が殿下にお伝えに上がったままでです」

「なんていじらしい！我が妹はなんて兄思いの優しい子なんだ。デイオ、お前もそう思うだろう？これは急いで会いに行かなくては！職務なんぞ2の次3の次だ！！」

そう言うと部屋の主、フェニスタリア王国第一王子アルフォード「ロデルバ」フェニスタリアは部屋を駆け足で行った。

さっきまでのシリアス雰囲気と威厳はどこに行ったのか……

デイオはアルフォード王子の後を追うため部屋の火を消し部屋を出ようとした。

「……まったく、あのシスコンはまた職務を放置して」

「……宰相閣下。いらしてたんですか」

「ええ、今しがた。部屋にかけている術（アルフォード脱走探知機・特定の人物が部屋の外に出れば解る術）が作動したので来てみれば、案の定マリア様がらみとは」

気付けば扉にもたれ、腕を組んでいるカインがいた。月だけが照らす薄明かりの場所でも眉間にしわが寄っているのが解る。

「申し訳ありません」

「いえ、君が悪いわけではありません。どうせマリア様の作戦ですよっ？」

まったくもってその通りだ。実の所例の舞踏会の件でマリア様がアルフォード殿下にお願いするために自分はすぐに殿下にその旨を伝え、明日の朝にでも思っていた。しかし・・・

駄目よ。お兄様に一層お願いを聞いてもらえるよう演出しなくてわ！そうね〜お兄様最近お仕事が忙しくて連日徹夜をなさっているはずね。ここ数日朝しか御逢いできないし・・・

マリアが起きててお兄様の仕事が終わるのを待つてお願いしたら効果あるかしら？お夕食も食べず待つていた方がいかしら？リリアと食べたたこ焼きでお腹いっぱいだし。それにふわふわの『わたがし』もあるもの。侍女には食事はいらなくて伝えて・・・あ、でも起きてられるかなあ〜今のうちにお昼寝しといた方がいいかしら？うん、そうしましょう。ディオ、私今から少し眠るわ。ちゃんと起こしてよね、この話は2人だけの秘密よ。

マリア様にその話を持ちかけられた数時間前。絶対服従を誓っているこの身では君主を裏切ることではできない。とは言え食事も摂らないなどとマリア様が言ってしまったため（本当は結構お腹いっぱい）

周りの人間が心配して早くアルフォード殿下を連れて来てくれと自分に頼む始末……結局眠りの世界にいたマリア様をギリギリの時間で起こしてここまでやってきたのだ。マリア様を溺愛しているアルフォード殿下はまったくその思惑を気付かなかったようだが……

「殿下にはマリア様とのお話が終わり次第職務に戻って頂けるようにします。すいません、殿下の後を追わなくてはならないので失礼します」

「ええ、お願いします。ああ、それと後で紹介したい人が居るので仕事が終わったら私の部屋まで来て頂けますか？」

「？はい、わかりました」

ディオの返事を聞くとそのままカインは闇に溶け込む様に姿を消した。

まるで悪役のような登場と消え方だな……そう心の中で思いながら……あくまで心の中で。

ディオも王子の後を追うべく部屋を後にした。

第34話 シスコン（後書き）

策略家なマリア様をお届けしました。

第35話 御返し

ガシャン！

「……………」

「……………」

「……………お姉さま」

「……………わかってる、お願いだから言わないで」

「取敢えず片付けないと怪我してしまいますわ」

「……………そうね。箒を持って来てちょうだい」

私の言葉にシンデレラは背を向けすぐに箒を取りに向かう。

やってしまった。私としたことがこんな失敗を犯すなんて……………あ、折角の今日のメインディッシュ、白身魚のムニエルちゃんが床

と熱い接吻を……
この皿も結構気入ってたのに。綺麗に割れちゃったな。買い物も忘れて帰ってきちゃったし

なんでこんなことに……

時は少し遡り

「ごめんね、送ってもらっちゃって。お城さえ出られれば1人で帰れるから」

マリア様との楽しいお茶会が終わり、私は家に帰る為に来た時同様、デイト君と城の中を歩いていた。

「そう言うわけにはいきません。家までお送りします。町に出れば辻馬車もありますし」

「いやいや、いって。買い物も残ってるし、それに今はまだ仕事の中でしょ？」

「しかし……」

「では、私が送って行きましょう。丁度時間も空いていますし」

私たちの会話に突然第三者の声が入りこむ。
声の方向に顔を向けた。声の主は

「カイン様!？」

「なぜ、ここに!？」

私たちは驚き、その驚きをそのまま言葉にする。

なんで居るの!?!いや、ここで働いているんだから居てもおかしくないけどさ。

「丁度仕事がひと段落ついたところだったんですよ。マルク隊長から貴女が今日ここに来る予定だと聞いていたので休憩がてら御挨拶に行こうとしていたところだったんですが・・・もう帰られるのですね。折角ですし私がお送りしますよ。ディオ、君もそれでいいですか?」

why?何故!?

くそっ不意打ち過ぎないか?心の準備ってものがあるのよ、こっちは!!

いやでも責任感が強く真面目っ子なディオ君のことだ、きっと断ってくれるはずだ。

お願い。君に届け、この想い!!

「……はい。では、お願いします」

よよいつ！？デッデイオ君！？そこは断つてよ。何言ってるの、ねえ？この人と2人きりなんて耐えられないよ？この人はね、人の心の平穩を乱す危険人物なんだよ！？騎士なんだからそんな危険な人と乙女を2人きりにするなんて問題でしょう？いくら私が手も出されないような女でもここは察してよ！！

「あ、リリアさん、例の物、出来次第お届けしますね」
では、失礼します。

そう言うと私たちに一礼し、彼は無情にも去って行った。

しばらくは他愛のない話をした。カイン様は上司が仕事をしないので困っているらしい。お役所仕事も大変そうだ。なんとか普通に会話ができている。
が、

「ところでさっき言っていた例の物とは？」

ぎくっ！！

やっぱり突っ込まれるか。

「いや……その……大したことではないんです、はい」
なんとなく言いにくく言葉に詰まってしまふ。

「……そうですか」

スウーとカイン様周囲から冷気が流れた気がした。
心なしか寒い。なんで？

「あつあの……これ!!」

耐えきれなくなり私は手に持っていた袋をカイン様に差し出す。

「なんですか？」

カイン様も解らないという表情でこちらを見る。

「あつこの前は本と……ネックレスありがとうございました！
でっ、貰ってるばかりでは悪いのでこれっ!!」

「開けていいですか？」

無言で頷く。

カイン様が袋の中に入っている箱を開ける。

「これは……」

中に入っていたのはティーカップ。

私がこの前マリア様たちと一緒に作ったやつだ。

「あ、そのホント、全然いいものでなくて申し訳ないんですけど……」

・お礼どうすればいいかわからなくて・・・お仕事基本デスクワークって言ってたからティーカップなら使えるし渡してもあんま邪魔にならないかなあって思って・・・絵柄も男の人が持つてもおかしくない感じだとは思うんですけど・・・ああっやっぱり駄目です！こんな素人が作った、しかもティーカップなんて！また、今度お礼します。すいません、返して・・・」

「お断りします」

へ？

「もう頂きました。返しません、絶対に」

ありがとうございます。大切に使用してもらいますと笑顔でそう答える。

「いや・・・でも・・・」

私たちの顔の表情は今まさに相対しているだろう。笑顔 vs 困窮だ。愛想笑いには見えない。まるで本当にうれしいと思ってくれているようだ。そんなにティーカップが欲しかったのだろうか・・・はっ。もしかや丁度割ってしまっ買って買いに行くのが面倒だったとか？いやいやまさか

カイン様は困惑しきっている私と眼を合わせる。
そして

「駄目ですよ。もう私のものです」

そう言い、妖艶に微笑んだ。

「あ、あのもう一人で帰れます！ええ、ホント！！ごっ、御機嫌よう！！？」

私は堪え切れなくなりそう一言いい

逃げた。

第35話 御返し（後書き）

なんだろう、この2人。

書いてる自分が一番逃げたい気持ちにされてしまう。

第36話 その意味

「ねえ、ティーカップって貰ったらうれしい？」

「突然ですわね、デザインにもよりますわ。何事も実用的でなくては。なので自分でいいモノ見つかる方が早いし納得いくと思いますわ。それに今使っているのが割れでもしない限りいりませんわね。まあ、観賞用のアンティークなら別でしょうけど。お姉さま、私そんな物より新しいモルモットが欲しいですわ。1匹逃げてから足りなくなってしまうって。新しく捕まえ様にも最近罠に引っかけられていませんの。まるで逃げ出した子ネズミちゃんが裏で手を引いているかのように」

「……………リリアさま、ボク、へやにカギがほしいでチュウ。なかからしめれゆタイプの」

やっぱりティーカップは貰ってもあまり嬉しくないかな、うん。もっと実用的で相手が気にいってくれる物じゃなければ。もしくは安心感を与える物？

この時リリアの思考回路は完全に汚染されていた。でなければティーカップだって十分実用的だし、欲しいものにモルモットと答えたシンデレラに思いつきり突っ込みを入れたはずだ。

なんであんな物渡ししてしまったんだろう。ティーカップ・・・それも自分が作ったやつなんて・・・カイン様扱いに困ってるだろうなあ。笑ってくれてたけど・・・いつその事こんな物いらないうてはつきり言ってくればよかつたんだけど。

昨日のあれはやっぱり社交辞令か。ああ、きつとあれね、お役所仕事の人には上下関係とかも大変だろうから顔には出さないようにしてるんだわ。うんうん、流石ね。もう少しで騙されるところだったわ。もうこんなことでずっと悩むなんてまだまだね、リリア。

リリアは無理やり自分を納得させた。

「ああ、お姉さま、お姉さま宛てに差し出し人不明の郵便物が届いてましたわ。丁度暖炉に火も点いてますし燃やしましょうか？」

「そうねえ、気味が悪いから燃やしましょう・・・って流石に駄目でしょ！渡しなさい」

今にも暖炉に手紙を投げ捨てようとするシンデレラから手紙を奪う。危ない、危ない。恐らく昨日ディオ君にお願いした物だろう。わざと差出人不明で出してもらえるようお願いしたから。だって王家の

紋章入りの郵便物なんか届いてそれがばれたら大変でしょ？私って賢い！

シンデレラから手紙を受け取る。

舌打ちが聞こえた気がしたが気のせいだろう。

そのまま部屋に戻り中身を確認した。中には思った通り招待状が入っている。が前回のと少し外見が異なっていた。文章は同じで紋章も入ってはいるが前は確か銀色縁取りだったが今回は金色縁取りに名前が記入されていない。中にはもう一つ紙が入っていた。手紙の主はやっぱりというかディオ君であり、内容は昨日の件でのこととマリア様と来るのを楽しみにしていると云うような内容だった。

ありがとうディオ君、そしてマリア様。そしてようこそ、逆玉の興チャンス！！

目指せ、未来の王妃（の姉）と安寧な日々！！

取敢えず第一難問は解決ね。当日までこの招待状は隠しておくとして……次の問題は衣装だけ……まあ、これはお姉さまのお古を改造して（自分ではサイズが違いすぎる。特に胸部分）靴はな〜サイズの合わないな。あの娘、足小さいし踊るならピタリ合う方がいいしね。うん、これは後で探しに行くか。髪は私は苦手だから……ああ、チュウ吉にやってもらおう。うん、なんとかなるかな。

一番の問題は本人ね。どうすれば行く気になってくれるかしら。あの娘、年頃の娘のくせに色恋ごとに興味ないのかしら？（自分のことは棚にあげる）ないんでしょうね……きっと。欲しいものにモルモットって答える時点で。宝の持ち腐れね。まあ、これは舞踏

会に行つて男の人達にちやほや？されたら興味を持つかもしれないという淡い期待を込めよう。でもどうやって釣ろつか。後は食べ物くらいしか……

「お姉さま〜お腹すきましたわ〜ごはん。まあ、こんなところに丸々としたネズミが。丸焼き？それとも煮込み汁〜」

『ぎゃあああああああああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！
！リリアちゃまあ、早く、早くきちえくだちやい！！！！。ボクはネズミなのでおいしくないでチュウ！！イヤヤヤー！ー！ー！ー！ー！』

「おほほほほほ。元気がよろしいこと。新しい薬の材料にぴったりですわ。さあ、いらっしやい。あなたに一番似合うお仕事を与えて差し上げますわ。苦痛なんてありません。ええ、一瞬のことですわ」

………静かに考えこと一つさしてもらえないのだろうか、ここは。

リリアはため息をつき部屋を後にした。

第36話 その意味（後書き）

久しぶりの更新そして亀並みの話の動きです

第37話 悪魔との幼少時代

まさかまたここに来るなんて思いもよらなかった。

下町の裏通り『電時屋』

本来なら関わらないような場所。

「すみませ〜ん。伝時屋さん〜いませんかあ〜」

以前と同様いろんな物が店の中に置かれている。

私の声に答えるように店の奥から1人の男が出てきた。

この前を同じように髭を生やした30代ぐらいの男、伝時屋の店主。

「よいよい、お嬢ちゃん。まさかまたここに来るとは思わなかったぜえ。お望みの本は手に入ったんだろい？なんの用だい？」

「ちよつと探し物をね。ねえ、ダメもとで聞くんだけど履いたら特定の場所に行きたくなる靴とか、履くだけで足が勝手に踊ってくれるような魔法の靴ってないかしら？」

「…………それは魔法の靴じゃなくて呪いの靴の間違いじゃねえか？なんだお嬢ちゃん踊れないのか？もうすぐ城で舞踏会があるってのによ〜今町中いや国中の娘たちが興奮してドレスを用意したり踊りの練習してるぞう。お嬢ちゃんもこんなところ来ずに2番通り

に新しくできた人気の洋服屋にでも行けよ？今からじゃあオーダーメイドは難しくてもそれなりのは用意できるだろう。もしかしたら王子様に見染められるかもしれねえぜえ？」

「流行のドレスを身に纏ってお腹は膨れるの？むしろ無理に締め付けることでへっこむわね。私はねえ、自分程度の容姿の分際で王子様の結婚、やった〜玉の輿だわ！王妃よ、1番の幸せよ〜うはうは〜ってなるほど自意識過剰じゃないわ。自分で言うのはなんだけ自分のレベルは誰よりもわかってるわ。私は言わばモブよ、モブキャラ。ごく限られた一部の選ばれた人間を引き立てる側の人間なの。だから最初っから無駄な夢なんて見ないの。私が求めているのは山あり谷ありの人生じゃなくて可もなく不可もない平凡な人生なの」

モブ……目の前の少女は気付いてないのだろうか……いや気付いてないのだろう。

普通の年頃の娘はまず最初にこんな場所に来ないし、暗殺者に襲われて返り討ちにしない。(情報は入手済み)それにあいつが興味を示すような娘がモブキャラだと？ああ、言っただけでやりたいぜえ。お前は普通じゃないって言っただけでやりてえ。

「……で、やっぱり靴はないかしら？」

「……この店にはないが『ブラディー・ヒール』っていう物は存在はするぜえ」

「『ブラディー・ヒール』？」
血の靴？

伝時屋は記憶を辿りながら話します。

「ああ、別名『呪いの紅い靴』であり数世紀前の実話から出来ている話だ。詳しい話は忘れたが踊ることが大好きだった少女が履いていた靴だったそうなんだが、その少女が病弱で歩くことも満足にできない身体で死ぬ間際までその靴を履いて踊っていたと言われる靴だ。その靴は何十年たっても血のように赤く色褪せることなく輝き続け、次に履く人間が死ぬまで踊らせようとする呪いの靴だとか。色褪せない靴の赤色はその少女が踊りながら吐いた血べとも言われている。その話が本当なら履いた人間は間違いなく死ぬまで踊り続けるだろうよう。まあ、お勧めはできないがな」

死ぬまで踊り続ける靴ねえ〜仮に本当だとしてもあの娘なら呪いも跳ね返しそうだけど……

「……因みにお幾らくらいかしら？」

「マニアの中じゃレア物になるだろうからなあ〜家ぐらい買えるかもしれないねえなあ〜しかも大金はたいて買ってても何故か同じ店に帰ってくるって言うぜえ〜」

たっ高い！！！！しかも買ってても店に帰ってくるなんてその店まる儲けじゃないっ！新手の悪徳商法！？

「……くつ無念」

「だいたいなんでそんな物いるんだあ？」

「あら、客にそう言う事聞かないのがこういう店のセオリーじゃないの？」

「まあな。だからこれは純粹な好奇心だ
伝時屋がニヤリと笑う。

「どうしても今度の舞踏会に妹を連れて行きたいの」

そして玉の輿を。

「妹？なんだお嬢ちゃん妹いたのかあ。でも普通の娘なら喜んで行くことするだろう？」

「そうね。普通の年頃の娘ならね」
ふっ……普通の妹ならこんな風に悩まなくてすむのだろう。
思えばあの娘が普通だったことがあっただろうか、いやない。

伝時屋も考えた。

よく考えれば嬢ちゃんの妹って言う時点で普通じゃねえか？あはは

「ねえ、どうしたらいいと思う？」

正直相談できる相手がいない。頼る相手もない。あのインドア娘を外、それも大勢の人間が集まる舞踏会に参加させるなんて不可能に近い。

「どうしたらって言ってもなあ、妹ちゃん好きな野郎でもいるんじゃないの？ だったら無理に行かせる必要はねえだろう？」

「それはないわ。あの娘は年がら年中家の中に引き籠り、危険な研究を行い、あわよくば私の身体で人体実験を行おうとする危険人物よ！」

ああ、そう言えば昔あんなことがあったな。

あれはまだあのお義父様が生きていらっしたころ……

「ねえ、リリア姉さま、お外に遊びに行きましよう？」

「……行きたくない」

「まあ、リリア姉さま西の森に行きたいんですの？ でもあそこは禁断の森ですから今度にしましょう？ お楽しみは最後にしなくてわ。今日はノルクオンの丘で次の実験で使う薬草を取りに行きましょう。それとも丘の上からバンジージャンプをなさいます？ 藁で作った口ブでやるのでスリル満点ですわ」

お楽しみってなんだ、お楽しみって！ っていか行きたいなんて一言も言っていないし！ バンジーだってどうせ私にさせて高みの見物でしょ！！ 言ってもやらない。そして逃げたい。でもシルヴィアを守るという契約書にサインをしてしまったため、あまり傍を離れることも出来ず、お願い（命令）にも逆らえない。あまりに激しく拒否すると全身に電流が流れる感じがするのだ。一瞬のことだけど結構痛い。

「ねえ、たまには他の子たちと遊ぼう？」

「一応妹の今後の為にも一言言ってみたりもした。」

「嫌ですわ。他の子たちはリリア姉さまと違って、つまらないんですもの」

「でもこの前一緒に遊んだ可愛い子、え〜と名前なんだっただけ？まあ、それはいいとして、シルヴィアともう一度会いたって言うてたじゃない。シルヴィアは元々あの子とお友達なんですよ？」

「あれは弱いくせに毎回毎回私に勝負を挑んでくる愚か者ですわ。お友達でもありません。」

「いや、あの勝負？はどう考えてもあんたが卑怯かつ鬼畜な手で相手をぼろぼろにしたたろう？物凄い笑顔で……」

「それにリリア姉さま、どんなに可愛く見えてもあの子男の子ですわよ？男なんて生き物はろくでもなく浅はかで単純、人の外見しか見えない知能の低い生物ですわ。それに汚いし。リリア姉さまご存知？男は歳をとると悪臭を放つんですわよ。その悪臭の原因は身体の脂肪が溶けて腐っていく臭いらしいですわ。リリア姉さま、そんな生物と一緒にいたいんですの？」

「……身体が溶けちゃうの？いつ……生きてるのに？……
・やだ……怖い……」

私はシンデレラの言葉を信じ恐怖した。せつかく出来た優しいお義父様も溶けてしまうのだろうか。

「そうですね。怖い生物です。近寄ってはいけませんわ。だから2

「……なんか気持ち悪い」

不貞腐れた感じに伝時屋が言う。正直髭をぼつぼつに生やしたおじさんがそんな顔しても可愛くもなんともない。

「……人がせつかくいいアイデア思いついたつてのにようく別に知りたくなければいいんがけどなあ」

「えっ嘘！？ホント！？」

「ああ。あくまで一つの手としてだがな。聞きてえか？」

「是非つ！！！！」

伝時屋はにやりと笑い言葉を続けた。

「それわなあ……」

第37話 悪魔との幼少時代（後書き）

更新遅くなって申し訳ありません。

読んで下さっている皆様、ありがとうございます！

第38話 勝者と敗者

「ねえ、シンデレラ」

「はい、なんでしょう?」

「お城の舞踏会行きたくない?」

「いいえ、まったく。米つぶほどにもありません」

「.....」

第1ラウンド勝者シルヴィア

「でも、王子様に会えるまたとない機会だよ?」

「王子とて所詮ただの人ですわ。会って何かメリットでもありませんの?」

「・・・・・・・・」

第2ラウンド勝者シルヴィア

「国中の人が集まるじゃない？あんたの好きそうな職種……研究者とか魔女とか黒魔術師とか来るかもしれないじゃない？」

「仮に来ていたとして、どう見分ければいいんですの？会場は正装しないと入れませんわよ。それに後半の黒魔術師は来ている時点でしょっ引かれますわ」

「・・・・・・・・」

第3ラウンド勝者シルヴィア

「モルモット欲しいって言ってたじゃない？お城は広いから新しいネズミも手に入るかも」

「まあ、欲しいしお城にはいるでしょうけど、そう簡単にお城のネズミが捕まえられたら衛生的に問題ですわ。そんな所の食事は頂きたくありません」

「・・・・・・・・（確かに）」

第4ラウンド勝者シルヴィア

「お城には図書館があるわよ。普通では手に入らないあんたの好き
そんな禁書もあるんじゃない？」

「ええ、数少ないお城の魅力の1つですわね。でもあそこの本は1
つ1つに呪いが掛っていて解読が難しく、王族の血脈者でないと開
くことができないんですの」

「そうなの！？（ていうか、なんでそんな情報知ってるの！？）」

「ええ、残念ですわ。流石に王族の方を洗脳……お願いするの
は難しいですもの」

「……（今、洗脳って言った）」

第5ラウンド勝者シルヴィア

「で、でも、舞踏会を機会に王子様と仲良くなれば見せてもらえる
かもー！」

「まあ、お姉さま。そう簡単に禁書を見せる様ではとても王子とは
言えない浅はかな人間ですわ。将来王になる方でしょう。その方が
国の頂点に立てばすぐに国は右肩下がりに傾きますわ。女一人の願
いに簡単に応じる様な王……そんな愚王の下で私生活なんてした
くありませんわ」

「・・・・・・・・（国の王子に向かって愚王・・・・・・・・）」

第6ラウンド勝者シルヴィア

「貴女は舞踏会に行かなくてはならない。もし行かなければ大きな災いが貴女を襲うだろう」

「・・・・・・・・なんの真似ですの」

「最近町で有名な占い師の言葉よ（嘘）！行かないと大変なことになるかもしれないわ！」

「まあ、それは大変ですわ。急いで災いの元を断たなくてはなりませんわね。お城の一部が爆破でもされたら舞踏会は中止になるかしら？今、面白い実験をしていますの。丁度試してみたかったので丁度いいですわ。リア姉さま、その占い師はどちらにいらっしやるの？ぜひ今後についてご相談したいわ」

「ごめんなさい。嘘です」

「まあ、安心しましたわ。新しい実験の成果を試してみたかったのですが、これは別の機会にしましょうか。ああ、でもリア姉さま、わたくしに今嘘を？ひどいですわ。わたくしに嘘をつくだなんて。大好きなお姉さまに嘘をつかれるなんて・・・この悲しみを癒すことは難しいですわ」

「ごっごめんね？そうだ！『エマ』のチーズケーキ買って来るわ！だから・・・・・・・・」

しまった！シンデレラに害がない嘘はつけるけど、契約上（無理やりされた下僕下契約）基本的に嘘はつけないし、ばれると恐ろしいお仕置きがまっている！

「いいえ、リリア姉さま。嘘は嘘ですわ、ねえ？」

「！っいやあああああああああ！！！！」

第7ラウンド勝者シルヴィア

第39話 まさかのOKサイン

さてどうしたものか。今だにあの娘から舞踏会に参加するということ同意を得られていない。

いろいろとやってみたものの失敗に終わった。もう策がな．．．いや、まだ使っていない策はあるにはあるが．．．

伝時屋が提案してくれた策はまだ使ってはいない。けどあの策であの娘が動くなんて到底思えないし嘘だと見破られた時が怖い。それに何より恥ずかしい．．．

回想

時は伝時屋に相談した日に遡る。

「何それ？私はつきり言っつてそんなキャラじゃなし、第一そんな理由であるの引き籠り悪魔が首を縦に振るなんて到底思えないわ。何より私、下手に嘘をつけないのよ」

伝時屋の提案はとても言い策とは言えるもとではなかった。確かに今まで試したことがない、いや、試そうとも思わなかった方法ではあったが。

「まあまあ、お嬢ちゃんこ、ここはあえてそのギャップをつくんだよ。嘘って言っても、全部が全部嘘なわけじゃねえだろ？今までそんな話しなかった姉が急に言ってみろ。逆に気になるんじゃないか？試しに一回言ってみたらどうだ？」

「でも………」

「話を聞く限り、お嬢ちゃんの妹ちゃんはシスコンっぱいからなあ、案外うまくいくかもだぜえ？」
伝時屋は笑いながらそう綴った。

「………」

話は戻り……

「ねえ、シルヴィア。お願いがあるんだけど………」

「なんですの?」

「お城の舞踏会に参加して欲しいの!」

「嫌ですわ。リリア姉さま昨日からそればかりですわね。わたくしが参加しないといけない理由でもありますの?」

「(ギクツ) いやゝそんなゝただ一緒に行きたいなあゝなんて・・・あはははは」

「・・・まあ、」

くつやつぱりお願い作戦も失敗か。ちっ!

この技は使いたくなかったけど背に腹は代えられない!信じるわよ、伝時屋!!

「・・・実は・・・その・・・好き・・・じゃなくて・・・気になる人が居るの!お城で働いている人・・・なんだけど、ほっほら、舞踏会に行ったら会えるかもしれないし、上手くいけばダンスだって・・・でも1人じゃ心細いから・・・だから一緒に来て欲し・・・」

「・・・気になる人」

ゾクッ

シンデレラの一言に背筋が凍る。そして一瞬の内に全身の毛が逆立

つよつな感じに囚われる。言葉の音色が恐怖にも似た心境に陥らされる。

危険。危険。これ以上喋ってはいけない。頭ではなく本能で理解する。

これ以上言つと恐ろしい何かが起こる。

でもなぜ？今の発言のどこに・・・やっぱり気になる人つてのが嘘だつて気付かれた！？

それともそれぐらい1人で行け！みたいなの？

「・・・まあ、リリア姉さま！気になる方がいらつしゃつたの！？もつと早く教えて下さつてもよかつたのに・・・最近様子が可笑しかつたのもそのせいかしら？」

一瞬のうちにシンデレラはいつもの音色と笑顔で話しかける。

「えつ・・・ええ・・・そうなの。黙つててごめんなさい」

先ほどの恐怖がぬぐいきれず詰まりながら返事をした。

「大事なリリア姉さまの意中の相手・・・わたくしもぜひお会いしておきたいわ。そう言う事情ならばわたくし、ご一緒させて頂きますわ」

いっ……今、ごっご一緒って言った。つまり行くってことよね？
嘘……

「……行ってくれるの？」
聞き間違いかもしれない。

「ええ、舞踏会に参加致しますわ」

シンデレラは姉を安心させるかのように笑顔で答える。さっきまで感じていた恐怖感は、今はもう跡形もなく消え去ったと言っているほどだ。

「あっありがとう！」
興奮気味にお礼の言葉を返した。

「あ、でもリリア姉さま、わたくし招待状がございませんわ
これでは参加できませんわね。
困ったと言うようにシンデレラが頭を悩ませる。
確かにその通りである。でも……

「大丈夫！招待状は私が用意してもらったから！！」
やった〜凄い、凄いわ。伝時屋さん！！これからはちゃんとさん付けで呼ぶわ！ありがとう！
いや〜でも本当に成功するなんて……もしかして本当にシスコン？いや、まさかねえ

下僕が主人を裏切ろうとしている感じが嫌とかそんな感じに違い、うん、絶対そうだ。

まあ、でもこれで招待状の問題も本人の問題も解決だわ。ふふん〜
ふん〜

浮かれていた私は自分の失言に気づかなかった。

「『用意してもらった』？ リリア姉さま、招待状はそう簡単に再発行できるものではないと思うのですが？」

「つつつ！！！！！！！！！」

しまった！ 下つ端の人間がそう簡単にできることではない。さらに言うとお城の人間と親しいことを知られる。このまま行くとマリア様たちのことばらさなきやいけなくなる。それはイヤだ。私の心のオアシスが！！

「いや・・・その・・・てっ手品、そう手品よ！ 最近手品がマイブームでこの前、マリーお姉さまが招待状を燃やす前にちよちよいのちよいつと！！」

「まあ、そうでしたの。全然気づきませんでしたわ。是非、もう一度シルヴィアにも見せて下さいまし」

笑顔でさあ、どうぞ。と言わんばかりに促すが・・・

「今日はネタ仕込んでないからまた今度ね！あ、そろそろ夕食の準備しなきゃあはは……」

到底無理な話である。

第40話 その心の奥に想う心は

静かな午後のひと時。特に急ぎの仕事もなく、次いつ来るかも解らない来客を店の奥にある椅子に座り待つ。

裏通りにひっそりと構える店は昼夜問わず静かなものだった。

男は眼を閉じ、耳を澄ませる。

男の耳は『聴く』ことに特化しており、意識すれば遙か遠くの『音』という音を聞くことができる。

一人一人履いている靴、その人の体重、癖により足音は違ってくる。男の耳に最近よく聞くようになった足音が聞こえ出した。この裏通りにこそぐわぬ、軽くりズムある足音である。

いつもより少し軽やかに、踊るような足音。しかし紛れもなく彼女の足音であろう。

男は思わず口に笑みを浮かべた。

後100mm・・・50mm・・・5・4・3・2・
1・・・

勢いよくドアが開き、ドアに付けてある鈴が鳴った。

「伝時屋さ〜ん〜居ますか〜!？」

声の主はやはり彼女のようだ。

椅子から立ち上がり声のする方に向かう。

「あ、よかった、居たのね！」

顔を見せると同時に少女から笑顔が溢れている。

「よお、お嬢ちゃん。なんでえ、機嫌がいいみてえだな。っとするとうまくいったかあ？」

「ええ、そう！そうなの！！貴方スゴいわ！貴方が言った作戦で成功したのよっ！！」

興奮気味に話しだす少女を見て、自分の提案した策で上手くいったことを知る。

同時に予想が確信に変わった。

少女の妹は『シスコン』。あいつの追尾の術を破るほどの実力のある相手が、あの少女の妹とは・・・あいつも苦労するな・・・いや、少しくらい苦労すればいいじゃないか、この際？でもどうなるだろうなあ〜

などといういろくろく考えて、ふと気付く。

「そついやあ〜お嬢ちゃん。妹ちゃんを舞踏会に参加させるための策だったとはいえ、そう言っちゃまった以上、誰か紹介しにやあきやならねえぜ？あ、誰かホントに気になるヤロウはいねえのか？」

こつちとしては紹介しようと考えている相手を知りたいとこだ。あいつは少なからずこの少女を気にいつている。いや、むしろ今までにないくらい執着心を感じる時さえある。

問題は少女の方だ。あいつは性格さえ・・・性格さえ除けば誰もが羨むパーフェクト人間だろう。もし自分が女であいつの本性を知らなければうつかり惚れてしまうほどだろう。普通にそこらにいる女たちは間違いなくあの顔で、優しく微笑みかけられでもすれば一発だろう。だがしかし、目の前の少女ははっきり言って普通ではない。そのくせ自覚はなく何故か普通にこだわり『普通』が一番な信

念の持ち主。そんな少女が明らかに『普通』じゃないあいつを恋愛対象として見るだろうか……。あ、なんかやばい。本気で考えれば考えるほどあり得ない気がしてきた。ああ、いけねえ。いろいろ考えていて目の前の少女の存在を忘れるところだった。

「……………」

「……………」

しばらく無言の時間が流れる。

「その件んだけどね、実は本当に紹介したいなあって思う人がいて……。気になる相手というか……。伝時屋さんも知ってると思う人んだけど……………」

ほんのりと頬を朱に染め、おずおずの少女が言葉を紡ぐ。

その言動にまさかと期待してしまう。俺も知っている相手なんて限られている！これは……………」

「……………なんていうか、こんなこと初めてだし、相手の人にも承諾を得てないんだけど……………」

おお、まさか！なんだよ。やっぱりお嬢ちゃんも年頃の娘だったん……………」

「王宮騎士団にいるディオっていう男の子なんだけど・・・確か本人から昔の知り合いだって聞いたんだけど、どういう知り合い？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・今、誰って？」

「もう、だから王宮騎士団に所属しているディオ君！もしかしてディオって名前の子、他にもいるの？あ、そう言えば私ディオ君の姓、聞いてなかった。今度聞かなきゃ」

「・・・・・・・・・・王宮騎士団にディオなんて名前の人物は1人しかいない。っというか自分の知り合いにディオなんて1人しかいない。」

「んで、そのディオとお嬢ちゃんが・・・・・・・・えっ！？どういうこと！?!？」

「確かに王女のお忍び城下町探索の際に2人は一緒に行動している。え、もしかしてその間に愛が芽生えちゃったの！？このお嬢ちゃんに！？あのディオに！？
そんなまさか・・・・・・・・」

「私、同年代のお友達っていなかったから、こんなことって初めて

で

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

再度頬を染め、それを覆い隠すように両手を頬に当てるその姿は、さながら恋する少女のようだが、しかし。

「・・・・・・・・・・友達？」

「ええ、友達。あ、ちゃんとこれは本人の承諾を得てるから！」
だから、私とディオ君は友達なのよ。と、そう続ける。

え、ちょっとおじさんついていけない。なんで友達？っていうか、なんで友達で頬染める？なんで紹介する相手が友達？え、どういうこと？

「ディオ君なら、マリア様命だから、あの娘を見ても惑わされなさそうだし・・・・・・・・あの娘もディオ君なら気にいるのまではいかなくとも、悪く思わないはずだし・・・・私今まで友達ってほとんどいなかったから、嬉しくって。流石にマリア様は紹介できないと思うんだけど・・・・・・・・せめてディオ君は紹介して堂々と遊びに行きたいじゃない？」

「・・・・・・・・・・えーとお、つまり・・・・・・・・お嬢ちゃんとディオは友達

で、それ以上の関係ではねえ？」

「当り前じゃない。デイオ君は大事な、大事なお友達なのよ！
デイオ君だつて選ぶ権利があるのよ。失礼よ、もう！」

心外だと言わんばかりに目の前の少女はぶりぶり怒りだした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あ、でも舞踏会で理想の相手に出会えるかも！王子様の結婚相手を探するのが目的の舞踏会だけど、王子様以外の男性がその場にいな
いわけじゃないんだし。家が農家とか商家、下級貴族あたりの近衛
とか・・・・・・・・」

「・・・・・・・・それよりも、もう少し上を狙ってみたらどうだ？王
子の側近だとか、高級官僚とか・・・・・・・・宰相とかよう？」

探るように、そして淡い期待を胸に聞いてみる。

「やだ、あり得ない！想像もできないわ。第一宰相つて、身の丈を
弁えろつて感じよ、自分に。絶対ないわ。私の理想と正反対の位置
にいる人なんて最初つから対象に入つてないわよ」

淡い期待は見事に打ち砕かれる。それはもう、完膚なきまでに。
どうなるんだろう、これ。

もう、いつそ聞かなかったことにしたい。

「……そう……か。まあ、頑張れよ」

なけなしの気力でそう言い放つ。

そんなことなどまったく理解していない少女は

「うん。あ、もうこんな時間！今日は報告とお礼を言いに来ただけなの、本当にありがとうね！また来まーす」

笑顔で礼を述べると店を去って行った。

「……また来るって、ここは再々人が来るとこじゃあねえんだが
ああ、やめよう。せめて今だけは何も考えまい。」

裏通りから人々が賑わい行き来する大通りまでの細い裏路地。
日も沈みかけ、影の長さも来る時より長くなっているのを感じる。

『誰かホントに気になるヤロウはいねえのか？』

あの時頭に過ぎったのは
深く透き通った緑色の瞳。
頬を……髪を梳いたあの手。
雫の蒼い宝石。

よく似合います。

駄目ですよ。もう私のものです

違う。違う。

思い出すたびに胸の奥が締め付けられる感じも、早くなる鼓動も。

ガラス越しに映る自分の頬が、熟した紅い果実のように真っ赤なのも、夕日のせいだ。

そう自分に言い聞かせる。

この類の赤みも胸の高鳴りも、全部夕日と走ったことにしてしまおう。

リリアは家までの道のりを駆け足で帰った。

第40話 その心の奥に想う心は（後書き）

何カ月空いたんでしょうか・・・ホントすいません。
読んで下っている皆様、本当にありがとうございます。

うな美しさだった。

が、しかし、言葉の内容は失礼極まりないものである。

「……ねえ、どこから突っ込んだらいいわけ？一応私、あんたの義姉なんだけどね！？そこんとこ理解してるのかな？」

「酷いですわ、お姉さま。わたくし出会ったあの日からずっとお姉さまを慕って来ましたのに……あの日約束してくれたではありませんか、シルヴィアを守ると！」

わたくし人語を操る他生物を見たのは初めてで、今でもあの時のことを思い出すと胸が高まりますわ。これならシルヴィアの従属となつてくれると!!」

他生物……これ……従属……

私は列記とした人間だっつものっ！くそ、あの契約さえなければもつと優位に立てるのに……今に見てる、貴様を玉の輿に乗せ私は自由を手に入れて見せるわ！

「って、今はそんなこと言ってる場合じゃない！ちよつとあんた、これどういうこと!?!」

そう言つてリリアが指を指した場所には、水浸しの床と汚れた大量の布切れ。

「ああ、それはですね。先ほど実験を行っていたのですか、誤って薬品を床に零してしまいました・・・そのままにしておく物質を溶解させる液体でしたので、これはいけないと思って拮抗作用のある液体をまいたんです。そのお蔭で、床が腐敗する心配はなくなったのですが、臭いが残しまして・・・先日お姉さまに毒ガスと罵られたでしょう？わたくし、これ以上お姉さまにひどい事を言われない様頑張ってお掃除しましたのよ？今回はほぼ無臭ですわ、褒めて下さいまし」

可愛い顔を最大限生かし、胸の前で手を握りながらの上目づかい。

「まあ、偉いじゃない！これ以上無駄な家の修理代を出さなくてすんだ上に、ちゃんと掃除もするなんて。あんたが家の事を心配してくれた上に、掃除を進んでするなんて！私は今喜びで胸いっぱいよ！・・・でも言うと思ったか、ボケ！私は今怒りで胸いっぱいよ！どうして床が水浸しのままなのよ。床が痛むし、結局腐りやすくなるでしょ！だいたいなんで衣裳部屋で実験してるの。危ないからせめて自分の部屋でしなさいってあれほど言ってるでしょ！？この部屋には、もしものの為の鎮火魔法具や防御魔法具を備え付けてないのよ。それに雑巾だって、こんなに大量に使用しないの！ぼろぼろになってから新しいの使う！もったいないでしょ・・・うきやあああああああああ~~~~~」

プリプリと怒りながらもリリアは部屋に入り、山住にされている雑巾と思わしき布を手にとり、後始末の為、床をそれで拭こうとしたが、手に取った布は雑巾ではなかった。っというよりも、布切でも

ない。れつきとしたその部屋し仕舞われていた高級ドレス。
滑らかな絹の生地、細かな刺繍に色鮮やかだったそのドレスたちは
薄汚れ、本来のドレスの美しさを微塵も感じる事ができない有様
であった。

「~~~~~!!!!!!?????????
?????」

余りの出来ごとに悲鳴を上げた後は言葉にもならず、ただ元ドレス
を凝視した。

こっ、この元ドレスたちはお母様やマリーお姉さまのドレスたち・
・・もしこれが知れたら・・・いえ、この被害総額は・
・・

「あら衣類の中でも品がなくて、使い物にならない様な物を使った
つもりなのですが、ダメだったのかしら?その布、水の吸収が悪く
って」

中々水を吸ってくれないから、思ったよりも多く雑巾を使ってしま
いましたわ。

そう軽く言う言葉の力も湧いてこない。

確かに派手で露出も多くきわどいのもあったけど!私には到底着れ
ないけどさ、でもあれ一着に幾ら掛かったか。もしマリー姉さまが
着なくなれば町の古着屋に売りに行けるし、売れなくても元々の生
地がいいからハンカチとかクッション縫おうと思ってたのに・・・

「……………今日の夕飯はピーマンがメインよ」

「お姉さまの鬼」

「なんともお言い！取敢えずここの掃除をするわよ！掃除ついでにあんたに合いそうなドレスも探さなくっちゃ！いい加減、舞踏会の準備しないと間に合わないし」

今の我が家に、使用人やお針子を雇う余裕なんて微塵もないのよ！

「わたくし、この格好でも構いませんわよ？」

「あんたねえ、あんたのその容姿でそんな格好で舞踏会に出てみなさいよ。明らかに悪目立ちでしょう！まあ、王子様のお目に留まりたいなら別だけど」

まあ、こつちとしてはそれもいいけどね。でもお母様たちも一緒に来るんだし、それなりにいい格好させないと気づかれる可能性が高いし。ばれたら面倒なことになるに決まってる。

国中の年頃の娘が対象といっても、たかが数時間の舞踏会。その中で相手を選ぶとしたら絶対に容姿で選ばれる。所詮人間など第一印象が重要だ。たかが数時間の舞踏会でその人間の本質など解りはしないわ。その点、あの娘の外見は見る者すべてを魅了するほど。

美しい少女が、美しいドレスに身を包む。一気に注目を浴び、王子やその側近あたりの人間の興味を引けるはず。ついでに王子様がこの娘に一目ぼれでもしれくれれば、更によし！

日頃、マリア様という、愛らしい天使の顔を見慣れているだけあって、そんなじょそこの器量良しさんは目じゃやないはずだ！

ああ、なんて賢いのリリア！見える、見えるわ。（あの娘が）玉の輿に乗る輝かしい夢（未来）！幸せの扉はもうすぐそこね。待っていて、私の未来の旦那様！

「でも、わたくし、マリーお義姉さまのドレスは趣味ではありませんわ。胸のあたりもきつそうですし・・・かといってお姉さまのドレスは合いませんし。胸がきつくて腰は緩いし裾部分が短いですわ」

「・・・わざわざ言わなくていいことを！だれもそのまま着るなんて言わないわよ。あなたに似合いそうな選んで、手直しと少し改造しようと思って」

「あら？でも、お姉さま、家事の中で一番苦手なのは裁縫でしたわよね。御髪も結えない不器用さんですもの」

「手先が不器用なだけよ。細かすぎるの、お裁縫とかは！でも雑巾とは縫えるわ、刺繍は無理だけど」

「それでは意味がないのでは？可哀そうなお姉さま、家事に必要な能力は磨けても淑女に必要な能力は磨けなかったのですね。御労しい」

「ねえ、マジでケンカ売ってる？しょうがないじゃない、あなたに合うドレスを買う余裕なんて家にはないの！それともあなたが毎度毎度渡してくる多額の通販の請求書払ってくれんの？だったらドレスの一着くらいこっそり仕立ててあげるわよ！」

大体、淑女の嗜みの一つと言われている刺繍わね、あんたらが好き勝手に、その後始末ばっかりしてたから、する暇がなかっただけよ！私だって練習すればできたはずなのよ！きつと！

実際には読書に明け暮れ、轆轤回しに行ったり、釣りにハマったりと、案外有意義に時間を過ごしている事もあるのだが、リア自身が刺繍という行為にまったく興味を惹かれず、一度も自主的に手を出さなかった事は忘れ去られていた。

「酷いですわ、お姉さま。妹からお金を巻き上げようとするなんて！わたくし余りの仕打ちに涙が」

「わたしはあなたの仕打ちに涙で前が見えないくらい的心境によく陥るんだけどね、きつと言ってもわかんないよね」

泣きマネをするが如く両手で顔を覆う。

「ところでお姉さまはドレスどうなさるの？」

「今あるやつから選ぶから別に問題ないわよ。流石に今回ほどの規模の舞踏会には言ったことないけど、社交界には何回か行ってるからそれなりにあるし。幸い私の好みの服は流行ファッションって言うよりは、いつの時代でも誰にでも合うドレスだからね。多少古くても問題ないでしょう。」

「なら、わたくしも持っている服でかまいませんわ」

「だからあくその服じゃあ悪目立ちなんだってば」

「ドレスならよろしいのでしょうか？私も実は持っていますのよ」

みすばらしい衣服を身に纏いながらも、その美しさを曇らすことのない彼女は妖艶に微笑んだ。

えっ？白衣とか魔女みたいな服とか以外に！？

あ、なんか嫌な予感がする。

第41話 準備（後書き）

話が進みませんね・・・なんでだろ？
早く舞踏会のシーンまでいかねば。

第42話 開けてはいけない扉、トラウマへの道

2人は家の最上階、屋根裏部屋に来ていた。

そこは義父の死去、母と姉によって自室を追い払われたシルヴィアの現在の自室兼闇の実験室でもある。

屋根裏とは言っても元がそれなりに大きな屋敷である為、不自由ない広さを兼ね備えていた。

「ねえ、なんであんたの部屋に行かなくちゃいけないの？」

衣装部屋の掃除もそこそこにし、リリアはシルヴィアに言われるまま屋根裏部屋まで来ていた。

そろそろ夕食の下ごしらえもしなくてはならない。

何よりリリアはこの部屋が苦手だ。幼少時代遊びと称して、ここで実験台の如くいろいろなことをされた記憶がトラウマとなり、根深く残っている。

「お姉さまに御見せしておきたい物がありますの」

シルヴィアは私の前方を歩きながらそう話す。

そして本棚まで足を運ぶと本を一冊取り出した。

本が何だと言うのだろうか。どこにでもありそうな、古ぼけた赤い表紙の一冊の本だ。

シルヴィアは本を開き、何かの音を発した。

『
』

呪文・・・なんだろうか。彼女が発した言葉は、私の耳には言葉として聞き取ることができなかった。そして次の瞬間にはシルヴィアが発した音がなんだったかさえ忘れていた。

それを疑問に思うこともなく、すぐに本棚が左右に開き始めた。たくさんの本が入っている本棚であるはずなのに音一つあがることはない。

左右に開いた本棚から出来た新たな空間は闇色に染まっていた。ただ啞然とするばかりだ。

シルヴィアは啞然としている私に振り返り言い放つ。

「さあ、お姉さま、参りましょう」

「なんなの、二二二？」

リリアは自分の眼を疑った。

シルヴィアの後に続き、闇色の中に入った瞬間、視界は一瞬で明るくなった。

視えるようになった視界で、四方を見渡すと自分がそう大きくもない部屋の中に居ることを認識した。その部屋はたくさん物が部屋を囲んでいるようだった。

その中には素人目にも解る骨董品や古そうな本もある。

シルヴィアはそのまま衣装棚と思わしき所まで行くと、そのままその棚を開けた。

中には色鮮やかなドレスたちが入っている。

「亡くなった母の物ですわ」

「え？」

シルヴィアの亡くなった母。それはつまり彼女にとって大事な物であり、形見の品でもあるという事だろうか。

だから私たちに見つからないように、こんな所に隠したのだろうか。

「亡くなった母が、生前男性に貢いで頂いていたもので、父に見つからない様この部屋に」

は？貢いでもらった？・・・父に見つからないように？

え、聞き間違い？今、なんか、あんま聞いちゃいけないこと聞いたような・・・

「母は、社交界でも有名だったらしくて。結婚しても求婚してくるような人もいたそうですわ。だから贈り物も多くって、ああ、これなんてどっかの男爵に貢がせたティアラ。古代マライラ帝国の王女が使っていたと言われる品ですわ。これを母に贈った男爵はその後借金で自己破産したと母が笑いながら話して下さいましたわ。コレクター品が手に入るうえに、勝手に害虫がいなくなってくれと」

これは確か、呪いのミイラの右腕ですわね。ああ、これなんて昔使
用していた拷問器具ですわ。

そう言う娘であるシルヴィアも笑いながら話す。

こいつのサディスティックぶりは遣伝子レベルの問題か！

お義父様、何故結婚したんですか！？やはり顔？顔ですか！？つて
ことは我が母も顔で選ばれただけ！？いや、もしかしてM？

なんですか、拷問器具つて！そんなうつつとりした、誰もが見とれる
様な笑顔で、そんな物見ないでください！

私は他に何も見てませんよ！ええ！水晶玉っぽいものに入った頭蓋
骨とか、ガラスケースに入った蠍みないな生物の剥製とか、変なお
面とか、全然まったく見てませんよ！

わっ！なんか目が合った。干からびた人間みたいな人形と目が合っ
た！！

リリアは1000のダメージを受けた。

もう瀕死状態に近い。

現実逃避という名の防御を行った。

50HPの回復したが、新たなトラウマが埋め込まれた。

なんて素敵なお部屋。アンティーク品（水晶やティアラ、拷問器具
など）。可愛い人形たち（ミイラや剥製）、キラキラ光る宝石たち
（禍々しい光を放っている）、大きくて綺麗な鏡（なんか鏡らへん
からうめき声みたいなのは聞こえるが、幻聴だろう）。うふふ、ふ
ふ。

「……さま、お姉さま」

「え？何？」

シルヴィアの呼びかけになんとか意識を戻す。

「これですわ、お姉さま。これならよろしいでしょう？」

そう言いシルヴィアが見せたのは、純白のドレス。

肩が出るタイプのドレスではあるが、際どい感じのものではなく、むしろ上品さを感じる型で、細やかなレースと金色と銀色の刺繍は余計な色が入っていない分、美しさを増していた。思わず見惚れるほどのドレス。そのドレスを着こなす事ができるのは、僅かな人間だろう。いや、そのドレスはまるで、たった一人の人間の為だけに作られたドレスのよう。

「きれい……」

「母が作ったドレスですわ。手先が器用な人で年頃になったら着てほしいと……」

憂いた表情でそのドレスを見つめるシルヴィアは亡くなった母親を思い出しているのだろうか。

サドなんて思つてスイマセン、シルヴィアのお母様！
うう、ええ話やあくすんっ今日はあの娘の好きな料理を晩御飯に
してあげよう。

「『何時かこれを着て、群がる害虫どもから搾れるだけ搾つて、駆
除するのよ。大丈夫、このドレスには呪いが掛っているから、貴女
を害する人は近寄れない様になっているわ』、と、母がわたくしに
これを贈って下さる際に言っていましたわ」

やっぱり、この親にして、この子ありって事ですね！

第42話 開けてはいけない扉、トラウマへの道（後書き）

気のせいかな、カインも王子も全く出てきてないな！あれ？
近日中にもう1話載せます！でも、期待しないでね！！

第43話 『友』と呼びたい人(前書き)

なんか無駄に長くなった！

第43話 『友』と呼びたい人

最近良く行く様になった町の小さなカフェ。

カフェの奥にはいくつか個室もあり、恋人や女の子たちの憩いの場にもなっている。

そんな奥の個室の一つ。テーブルを挟んで一組の男女が座っている。テーブルの上に肘を置き、祈るように両手を握る少女が徐に言葉を発した。

「ねえ、ディオ君」

「……何ですか」

「私たち友達だよね」

「……今日は何ですか。お一人様2本までの大根です？それとも卵、ああ、今日は醤油の特売日でもありませんでしたね」

ここ最近、毎度付き合っているタイムサービスにディオは慣れ始めていた。自らスーパールのチラシを見てチェックするまでに影響は及んでおり、同じ寮に住む隊員から変な目で見られている。

「ちがーうっ！！って違うくないけど。それは後でお願いするけどさ」

うう、ディオ君の視線が痛い。だって、戦力が多い方がいいじゃない。

「あのさあ、舞踏会の日にさ、一緒に妹に会ってもらえないかな？」

「リリアさんの妹さんにですか？」
デイオはまるで珍獣でも見つけたかのように目を見開いた。

「うんっ！友達としてちゃんと紹介しておきたくて！私の妹ちよつと心配性？でさあ、昔っから、まあ、なんやかんやとね・・・デイオ君ならしつかりしてるし、マリア様やカイン様で免疫ついてるでしょう？あの娘、昔っから私の行動にうるさくてさあ〜でも、デイオ君なら、あの娘も納得すると思うんだよね。ねえ、お願い！堂々とデイオ君やマリア様に逢いに行きたいし！！」

正直、絶世の美貌を持つあの娘が、あのドレスを身に纏い美しく着飾ったら。

あの娘は昔っから外見で人を判断する人を嫌っている。デイオ君は人の容姿を褒める様な器用なマネ（結構失礼）できないから、あの娘も気にいるはず！でも、デイオ君に害が及びそうなときは全力で助けよう！

「免疫ですか？一体なんの？」
なんやかんやと言葉を濁した所も気になるが、免疫とはどういうことだろうか。

「ん？凶器にも匹敵する、あの美貌にだよ」

マリア様の場合は愛くるしくって、なんでも許してしまいそうになったり、ぐてんぐてんに甘やかしてしまいそうになる、あの天使の様な笑顔。あ、ちよつと泣きそうになる顔も鼻血もんだよね。出血多量で貧血、最後は息絶えそうだな。でも、あの天使の笑顔見られるなら、冥土の土産にいいか？

カイン様の場合は、あれは悪質よね！あの微笑ひとつで相手の思考を停止させられるし、判断能力もかなり低下させるわ。カイン様のあの透き通るような綺麗な緑色の眼を見ると、なんか逃げられない気持ちになるのよね。あれは危険だわ！目が合うだけで、不整脈起こして死にかける人もいそう。男女問わない感じだし、危ない階段に何人も登って、最後は奈落の下？あ、傾国の美女？下手に近付くと危険じゃない、トラブルに巻き込まれそうだし。例えるなら歩く兵器かな〜カイン様って。

そう続けるリリアの言葉に、ディオは困惑していた。

マリア様は確かに可愛らしいと思うが、それは幼い子供を大人が慈しむ様な感情に似た物だと思っていた。だから多少の悪戯も我儘も黙認したし、近頃曇っていた笑顔が、何の翳もない笑顔に戻った時は心底ほっとした。幼いなりに自分の立場を理解している少女に対し、護衛対象の有無なく、守ってあげたくなる気持ちになる。

だから泣きそうな顔を見ても、この他人からしたら無表情に見える顔の下でおろおろすることはあっても、鼻血を出すことはないだろう。というか、鼻血を出す人は病気ではないだろうか。もしそうなら、感染する可能性もあるから、マリア様に近づけない様にしないでならない。

ああ、でも少し前に他国の皇太子が交遊目的で来ていた際、マリア様を見てかなり挙動不審になっていたな。よく面会を求めてきたし、今よりもまだ少し幼かったマリア様が疲れてはいけないからと、城の庭の歩く時は抱きあげようと何度もしていた。その際は体調でも悪かったのか、かなり息が上がっていた。マリア様もそう思ったのか、お断りをし、心配そうにその王太子の顔を見上げていたが、その時王太子が急に「うっ！」と呻き、顔を手で覆いながら、「申し訳ありません、急用を思い出してしまいました。愛しい人、また会いにきます！」と駆け足で去っていたな。その後直にアルフォード王子がマリア様の部屋を訪れ、その王太子が急遽自国に帰国したこ

とを告げた。

もしや王太子はご病気だったのだろうか。マリア様は特に体調を崩さなかったので、もし病気だったにしても感染らなくてよかった。病気だったのならマリア様に近付かないで頂きたいものだ。次来られた際は、事前に医師に診て頂いてから面会して頂くよう、上に報告しておこう。

カイン様に対しては、彼は我が国の宰相閣下であり、自分の命の恩人の一人でもある。

逆らってはいけない相手だと本能的に感じる時もあるが、仕事も公平で尊敬もしている。自分が文官なら上司はそういう人がいい。カイン様は自分付きの侍女や部下を持っておらず、日夜侍女たちが自分をとアピールし、裏ではお茶入れなど一つに対し、揉め事さえ起こっていると聞く。

昔、少しの間カイン様の護衛、とういか交代で部屋の前に立つ衛兵の仕事に就いた時は、部屋から出てくる人が魂の抜けたような状態になっていた。、「俺、あれならありだと思っ」、「あの人の、たった一人になりたい！」などと呟く文官もいた。やはり皆、尊敬できる上司の下に就きたいと思っっているのだろう。そういえば、部屋で失神する人もいて救護班を呼ぶこともあつた。あの人たちは仕事の上で倒れたとカイン様は言っっていたな。その後、倒れた人達は姿を現さなくなった。その人たちは養生のため、地方の仕事でゆっくりするようにとカイン様が言っつて仕事場が移つたらしい。さすがはカイン様だ。部下に対してもなんと慈悲深い。

「デイオ君、多分君は理解してないと思っつから言っつけど、美しいといのは、それだけで武器になり、他人を脅かす存在になりうるの。特にその事を理解している人間は、厄介なの！それが私の妹よ！ああ、でもデイオ君にはマリア様と一緒にこのまま何も知らず清らかなままでいてほしいかも・・・」

「はぁ・・・要するに妹さんにお会いして、きちんと御挨拶すればいいんですよね？でも、止めた方がいいと思います。今は騎士団に所属させて頂いていますが、元々自分は身分が低い上に、この容姿なので御家族には御逢い・・・」

ディオは諭すようにリリアに言葉を返す。今だ貴族主義が多いこの国でリリアの行動は明らかに逸脱している。

リリアから友人となって欲しいと言われた時も驚いたが、その時は貴族であるリリアがわざわざ自分からそんな事を公にするはずがないと思っていた。だから自分が何も言わなければ特に問題ないと。相手からすれば自分は簡単に切り捨てられる側の人間だから。友人になってほしいと言われたあの一言だけで、もう充分だったから。だと思っていたのだが、

「酷い！ひどいわ！友達になってくれるって言ったじゃない！！あの言葉は嘘だったの！？嘘つきは泥棒の始まりなのよ！詐欺罪で問われるかもなのよ！？うわ〜ん、ディオ君の結婚詐欺師！地味に顔整っているくせに！この脚長！！サラサラヘアー！」

「・・・・・・・・リリアさん、途中から可笑しいです」

「お願いと称して無理やり友達になってって言ったから！？逢うたびにタイムサービスに付き合わせてるから！？それとも食べれる雑草や茸を獲りに行くのに馬で送ってもらったから！？笑い茸を間違えて食べさせちゃったこと！？ディオ君の図書カードを使って大量の本を借りたから！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「！いいよ、行こう！！」

表情の変化に乏しく、喜怒哀楽が分かりにくい彼ではあるが、よく観察していれば何となく分かる彼の表情には、ほんのりと『喜』と『楽』が浮かんで見えた。

第43話 『友』と呼びたい人（後書き）

友情が深まった！いや、ここからがスタートなのか。

いつか2人（+マリア様）が和気あいあいとしてる所書きたいなあ。

まあ、まず本編完結してからだけどね！

はい、すいませんでした！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7638i/>

シンデレラの姉の計画

2011年9月29日00時26分発行